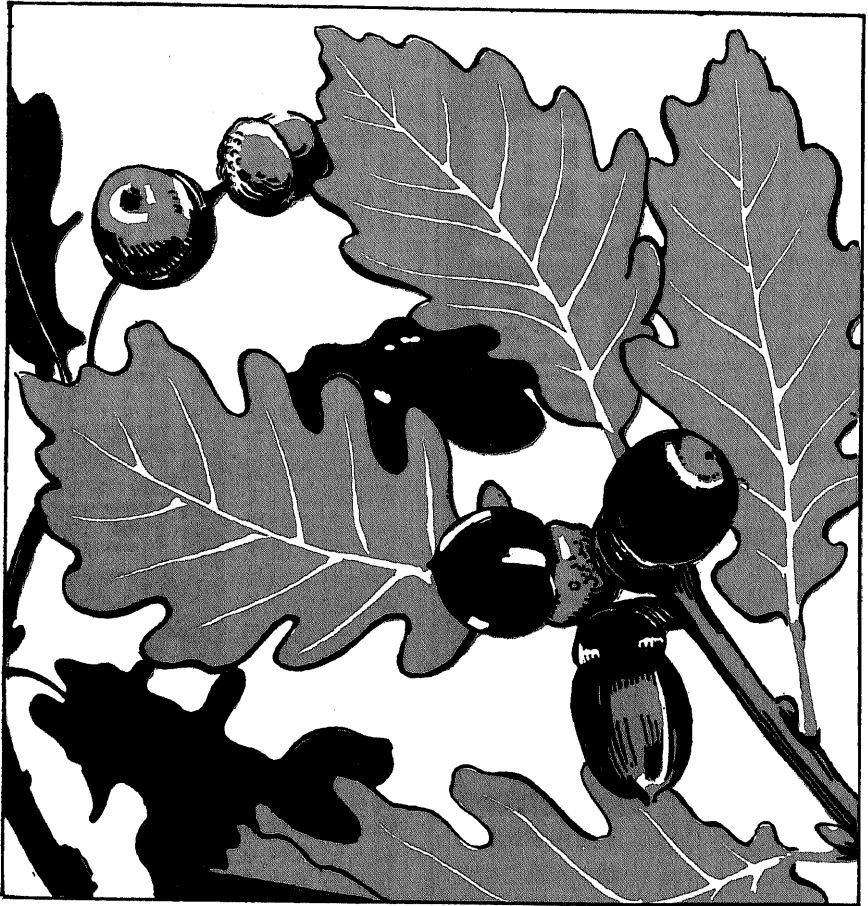


育教の兒幼

號二十第 號月二十 卷七十三第



內校學範師等高子女京東
會協園稚幼本白

廣島文理科
大學教授

文學博士久保良英著

菊判洋綴紙數三百頁
定價金二圓八十錢

送斜廿一錢

新刊

兒童の精神構造と指導

本書は心理學上より兒童の精神構造を科學的に解剖し、體係を立てて以て兒童教養の根本義を確立せるものである。兒童の教養は次期の國家の消長を決するものであるが、特に現今我國は非常の時局に立ち何事にも國民總和の力を以て當るべきの秋である。著者はこれに大に感ずる所あつて、世の教育家父兄の爲に特に本書を著したのだ。先生は我邦心理學界の泰斗で、本書は其深奥なる學問と豊富なる經驗との完全なる融合である。左に其大綱を擧ぐれば……一幼兒の精神構造 二玩具の選び方 三言語と文字の交友についての注意 五問題の子供の導き方 六家庭に於ける知育 七美的情操陶冶 八道徳教育 九宗教教育……一般教育家は勿論一般識者の必讀を望む。

東京高等師範學校教授

文學博士

小野島右左雄著

心理學要説

菊判紙數四百頁
定價金二圓十五錢
送料十二錢

教育の基礎となる
新しい心理學説

文檢要書

心理學の問題は嘗ての機械説より生氣説、準機械説等幾變遷を経てゐるが、體制に於ては今や其全面に涉り百八十分野の開拓とを意味するものである。人間科學の諸領域に於て著者は本書に於て新しい紹介や學説の羅列をさげ、専ら見方を教へ考へるに當つて重要な本書といふべきであらう。この意味に於て又一般知識人の必讀を俟つものである。

心理學の問題は嘗ての機械説より生氣説、準機械説等幾變遷を経てゐるが、體制に於ては今や其全面に涉り百八十分野の開拓とを意味するものである。人間科學の諸領域に於て著者は本書に於て新しい紹介や學説の羅列をさげ、専ら見方を教へ考へるに當つて重要な本書といふべきであらう。この意味に於て又一般知識人の必讀を俟つものである。

心理學の問題は嘗ての機械説より生氣説、準機械説等幾變遷を経てゐるが、體制に於ては今や其全面に涉り百八十分野の開拓とを意味するものである。人間科學の諸領域に於て著者は本書に於て新しい紹介や學説の羅列をさげ、専ら見方を教へ考へるに當つて重要な本書といふべきであらう。この意味に於て又一般知識人の必讀を俟つものである。

振替電話 東京三三三 八三三 四二二 七五番

店書館文中

發行所 東京市牛込區 辨天町一七四

生徒募集

本科生四十名

研究生若干名

願書受付三月二十日迄規則書は参錢切手

封入の上申込まれよ。

創立以來廿三年

大正五年東京市麴町區に創立。

昭和二年武藏野の中なる現在地に新築、

附近に森あり、野あり、川ありて四時自

然の恩恵を受け、本校の特色とする自然

觀察、博物採集、圖書寫生、自然物應用

の手工等材料豊富なり。

玉成保姆養成所

所長 ソファヤ・アラベラ・アルウ井ン

東京市杉並區西高井戸一丁目一三三

省線 西荻窪下車直南約五丁

再版

日本幼稚園協會編

幼稚園談話集

菊版三五〇頁
定價金壹圓五拾錢

郵稅

市內 金六錢

地方・北海道
朝鮮・滿洲

金拾五錢

四版

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編 系統的保育案の實際

定價金壹圓

送料金六錢

一保育案の實際は幼稚園必須の資料
一東京女子高等師範學校附屬幼稚園現行の保育の實際は各幼稚園好箇の參考
一待望の本書を全國幼稚園保姆諸君に勸む

月刊

幼兒の教育

一ヶ月 金參拾五錢

送料金一錢

一ケ年 金四圓貳拾錢

送料共

幼兒教育に關する忠實なる月刊雜誌として、眞に全國幼稚園、託兒所の方々のものたらんことを切望してゐます。

發行所 日本幼稚園協會

○定價及郵稅を添へ本會宛直接御註文下さい。

東京市小石川區大塚町卅五番地
東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
振替 東京一七二六六番

略畫の描き方と手技の講習會

講演題目及び講師

略畫の描き方 (實習五時間)

東京府青山師範學校
岡森教授主任

赤津隆助

素人でも出来る略畫の描き方を、最新の研究に基いて、系統的に實習指導致します。幼兒保育に従事する保母、家庭に於ける母は、必ずや之によつて大きな力を得らるゝ事と信じます。

新しき手技 (實習五時間)

東京永田町小學校訓導
昭和保母養成所講師

武井勝雄

最近の歐米視察によつて收獲せる所の資料と、多年の構成教育に關する研究とに基き、幼兒の爲の新しき手技を實習指導致します。御期待を乞ふ。

幼兒の手技の導き方 (講演及び實習五時間)

東京井荻子供の家
兒童研究所長

霜田靜志

幼兒の生活に於て極めて大切な要素である手技の全般に亘つて、最新の心理學的研究の立場から、其の指導法を述べ、各種手技製作法の實習指導を致します。

時 昭和十二年十二月二十六日より三日間 (毎日午前九時より午後三時まで)

所 東京市麴町區永田町小學校 (市電平河町下車)

會費 金參圓 (開會當日御持參のこと、他に實習材料費若干を要します。)

申込 往復葉書にて左記宛御申込のこと、返信葉書にて諾否御知せ致します。

主催 東京市杉並區井荻二丁目六十五 井荻子供の家庭兒童研究所

電話 荻窪四五四一番
振替 東京九五六八九番

倉橋惣三著
育ての心

定價 送料

東京、神田區駿河臺三丁目六
刀江書院

倉橋惣三著

幼稚園保育法眞諦

二、五〇〇、一六

東京、神田區神保町二丁目六七
東洋圖書株式會社

倉橋惣三共著
新庄よしこ

日本幼稚園史

三、八〇〇、二〇
同上

倉橋惣三著

幼稚園雜草

二、五〇〇、一四
内田老鶴圃

日本幼稚園協會編

幼兒に聽かせるお話

三、八〇〇、一四
同上

日本幼稚園協會編

幼兒の楽しむお話

二、八〇〇、一四
同上

日本幼稚園協會編
幼兒發達検査

東京、神田、神保町
フレーベル館

淡路圓次郎著

幼兒性行評定尺度

一、〇〇〇、二
同上

倉橋惣三監修
保育叢書

菊池ふじの著
徳久孝子著

幼兒のための
人形芝居脚本

一、〇〇〇、二
同上

及川ふみ著

幼稚園の手技製作

一、〇〇〇、二
同上

膳眞規子著

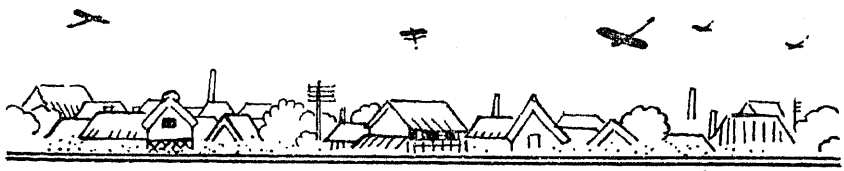
自然物おもちゃ

一、〇〇〇、二
同上

和田實著

實驗保育學

一、〇〇〇、二
同上



第 三 十 七 卷 幼 兒 教 育 第 二 十 號

—(次 目)—

口 繪

卷頭—百年前の追想……………倉橋惣三(一)

拜み出す保育……………齋藤善太郎(四)

クリスマス・ツリー・ミスミ子さんのお話……………武田雪夫(二四)

おはなしの道に我が友を得て……………大塚喜一(二三)

フレーベル賞童話

選外佳作 蚤と蠃と蟋蟀の高飛び競争……………幸田信子(三)

森のお友達……………中村全江(三五)

豚の旅行……………藤崎まゑ(四〇)

蛙と螢……………岡本千枝子(四四)

トンボは何に乗って行つたでせう……………山本文子(四九)

大阪と神戸の三日……………倉橋生(五)

幼児教育の文化性(四)……………倉橋惣三(五)

總目次……………(七)

仙臺市全國保育大會の延期

倉 橋 惣 三

仙臺市保育會長澁谷仙臺市長より十二月七日附左記來信あり、明年を期待せられつゝある全國諸君に誌上御報告します。

陳者本市主催東北振興大博覽會は御かげを以て諸般の準備も順調に進捗罷在候處、測らずも今次支那事變勃發に遭遇し事態は今や各方面共舉國之に當るべき重大情勢に立至り、慎重考究の結果無餘儀開催期を向ふ一ヶ年延期の事に決定仕り候に就ては、貴殿より熱烈なる御支援を賜り居候全國幼稚園關係者大會も、種々の都合に依り同様延期致度候間、御了承相成度、尙御手数恐入候へども其旨關係方面へ御傳被下度御願申上候



氷張る朝

幼 兒 の 教 育

昭和二十年十二月

百年前の追想

——フレーベルの幼稚園——

倉 橋 惣 三

今年フレーベルが幼稚園を創設してから百年に當るにして、外國でも我國でも、諸所に記念の會が催された。まことに喜ばしいことである。但し、今年すなはち一九三七年の百年前は一八三七年であつて、その年の一月フレーベルがブランケンブルヒに來て開始した事業は、今日の意味に於ての幼稚園では、まだなかつたといふ説もある。ほんまうに幼兒を集めて實際の幼稚園教育法を實施したのは、一八三九年からであるといふ論である。その點に於て確證を知らないし、一般の解釋に従つていゝきは思ふが、一八三七年に於けるフレーベルの興味は、彼れの創案の恩物の製作に普及すが、すべてでないにしても、その主なるものであつたかと思はれる。實は、この細かい點が私の頭からんでゐて、今年内に、百年記念に就き本誌に何も書かずに過ぎて仕舞つた譯ではあつたのである。

しかし、いづれにしても、フレーベルの幼稚園に關する深い潛心は、確にその頃から芽をふき出してゐた。當時フレーベルはブルグドルフに於て孤兒院に従事してゐたのであつたが、一八三六年頃から、人間教育の理念と思慕とが汪んになり、孤兒院長を辭し、ベルリン等を巡遊してゐる間に、恩物製作に關する考案が熟し、一八三七年から八年へかけて、プランケンブルヒで、その事業を興したのである。その間、フレーベルが、事業上の成功に力を注いだことは當然であつたが、その根本の思想が、兒童教育にあつたこゝはいふまでもない。つまり、フレーベルは彼一流の物による教育の考案を世に布かうしたのである。フレーベルの幼稚園といへば直に恩物を聯想し、甚しきは、恩物が幼稚園であるといつたやうな固定した考へ方を生じたのも、此の邊の事情に起因すると言つてよからう。

その中、一八三九年になり、その夏、フレーベルは深い考へを以て、幼兒教育講習會を開き、つゞいて、母のための講習會を開き、その、講習生の實習のために幼兒を集めて、「遊戯と作業場」を設けた。これが、一八四〇年になつて、彼の苦心の新名稱「キンダーガルテン」で呼ばれるやうになつたものである。そこで、われ／＼が、茲で認めなければならぬこゝは、フレーベルの幼稚園が、二つの源流の合併によつてゐるこゝである。その一流は、恩物に具現されようを試みられた、自己教育の教育思想であり、之れはフレーベルの一つの貴い創案であつた。他の一流は、家庭教育を婦人の手に於て完成しようとする、實際的意圖であり、之れはフレーベルの一つの貴い識見であつた。而して、此の二つの源流は、孰れを重し輕しとするべきものでもなく、殊に、その合流するところにこそ、幼兒教育としての活きた力を生じ來るものもいへるのである。

たゞ、強ひて二つを分ちて、それ／＼によつて考察を試みる態度をこつてみる時に、そこに多少の差異を立て得ないこゝもない。すなはち、前の源流では、教育理論が主となり、後の源流では、教育事實が主になつてゐる見られる。従つ

て又、フレーベルを單一に幼児教育者を見るは前者に倚り、フレーベルを女子、殊に母の教育者を見るは後者に倚ることもいふところになるであらう。實に、フレーベルは此の雙方であつたので、之れ亦、決して對立させるべき性質のものではないが、世の一般が、フレーベル及びその幼稚園を前の意味で認めること多きに比し、後の意味での認め方の足りないことは、聊か缺陷しなければなるまい。近時、フレーベルの故郷ドイツに於て、彼を女子教育者として尊敬する風潮の強く起り來つてゐることは、嘗て本誌に掲げたシュプランガー博士の講演(本誌十月號)國民教育家及び女子教育者としてのフレーベルにも見ゆる通りであるが、幼稚園関係者間には却つて此の認識が乏しいかきも見られる。殊に我國に於てそうであるまいか。そして、母の教育への働きかけを一つの特色とするアメリカのナーセリー スクール運動を、幼児教育施設の全然新しい計畫であるかのよう唱導したりする風がある。豈計らんや、フレーベルの幼稚園が疾くに、そこを意圖してゐたのである。(その内容に於て現代のナーセリー スクールの如くではないが)之れは、少くも、フレーベルの幼稚園をその創設期に於て回顧する時に、見逃してならないことであること信ずる。だからさいつて、一八三七年よりも一八三九年に重きを置いて、その方を主に記念したいといふやうな、さちらでも大して變りない考證論を繰るかへす譯ではないが、若し、一八三九年のフレーベルの意圖を含めることなき幼稚園創設百年記念は、決して、フレーベルの幼稚園をその完全な創案に於て記念するものさはいへないであらう。

世界が、フレーベルを特にその幼稚園に就て追憶敬慕した此の目出度い年を、本誌も亦一言それに聲を合はせることななくして逝かしては濟まないと思つて、この追想を語るものである。

拜み出す保育

——フレールベルを記念して——

齋藤善太郎

人類に、さしあたって我が祖國の人々に、本當にいゝ人になつてもらねばならぬ——然ういふ念願にもえながら、フレールベルが幼稚園を始めてから、はやくも百年の月日は流れて、人々によつて其の記念がなされてゐるやうであります。ブリュウフェル氏は其の當時のこゝを匂はしくも次のやうに傳へてをります。

「この巨大な計畫を持つてフレールベルは一八三七年ブランケンブルクへ來た。彼は明瞭に確信した。一つの高い美しい目的が彼を應じた。(中略)そこで『獨修學校』なる名の下に彼は教材作成のために一つの實業的事業を、ブランケンブルグで始めた。その際漸次彼は就學年齢前の子供に範圍を局限した。一般に人類の教育を高めるといふ、まだ漠然とした考は、子供をその生れた時からすぐに適當に働かせるといふ、新に狭く局限された目的の前に、今は消滅した。今や彼はその事業を『子供及び少年の活動衝動を育むための施設』と名づけた。」

「フレールベルは婦人を最初の子供時代の哺育者たる天職を有するものとして考へた。婦人本來の高い文化的天職は、既に發芽しつゝある人性を、意識的に新しいより高い人性にまで育て上げるにあると認めた。そこで彼は熱狂した言葉で獨逸の婦人や娘たちを呼んで結合させ、一つの強力な同盟を作らせ、かうして群集の力によつて、また習慣によつて、あらゆる母、最も怠情な母をさへ、その子供たちを適當に教育せざるを得ないやうにしやうとした。」

(ついでとあり、しかも幼稚園なるもの、活ける背景を、源流的にさとらしてくるどころですから、いまして引用します。)

「彼が一八四〇年六月二十八日にその『一般幼稚園』を創立した時、彼の意圖はこれであつた。この巨大な同盟の中心は一つの立派な學校、——フレヨエベルはこれをブランケンブルクに創立しやうとした——いはゞ女性の大學なる筈であつた。この獨創的計畫は殘念ながら金がないために畫餅に歸した。そこでこの大きな堂々たる學校の代りに、フレヨエベルは四十年代に多數の幼稚園を創立した。これらはそれ自身が目的ではなく、單に目的のための手段なる筈であつた。これは母親たちにまつて眞の子供の教育に於ける觀照の場所なるべき筈であつた。決して單なる小兒預り所なるべきではなかつた。今日なほ多くの素人は國民幼稚園をさう思つてゐる。單に小兒預り所を創立するだけのこゝならばフリードリヒ・フレヨエベルの如き人物を要しなかつたであらうし、その上このやうな施設は當時既に多數あつた。」

(茅野蕭々氏譯「母の歌と愛撫の歌」一八六頁)

我等の記念——念こころに記して、故ふるきを温たねつゝ更に新あらしきへ進すすみゆかしむる記念に、多くの指示しみかみを與へてくれる敘述しゆじであります。フレヨエベルの念願ねんげんはきんなに大きいものであつたか、造られたのではなく生なれた、眞の教育者きよくうしやとしてのフレヨエベルの遠い展望てんざんはきんなに廣く輝かがめかしくまた深いものであつたか、若々しい血ちを祖國愛そこくあいに燃えながら「我が獨逸」を守るために戰陣の野營やえいの夜の焚火たきびをかこみつゝも祖國そこくを人類じんるいの教育きよくうを友ともに談だんじあはずにはをれなかつたフレヨエベルの敬虔けいけんなる人間愛じんげんあいは、如何なる目標もくひやくをめざしつゝ其の計畫けいけんをたてゝゐるたか、それらの熱あつき力ちからを深ふかき大おほきさを我々のまへに示ししてくれる敘述しゆじであります。げにフレヨエベルにまつては、後に、一八四〇年に、幼稚園なる名なを負おはせるにいたつた施設しせつは、まさしく人間の教育きよくうの第一歩だいいつぽであり、その第一着手だいいつしやうであり、しかも其れを人類じんるいの名なに於てなしてくるはづの「女性」にょせい「母性」ぼせいによつてなしてもらはう、其のための研究所けんきゅうじよにしようといふものであつたのであります。

附けたりであります。ここに、ナポレオンの重歴のみに祖國獨逸が危くも國難に面して、そのために愛國者フィヒテが、ナポレオンの軍鼓の音を窓外に聞きながら「獨逸國民に告ぐ」を烈々き語りつゝあつた時、それに血をわかしたであらうフレーベルを、(一八〇七年、また、人間の教育さいふ大なるプランを腦裏に展開せしめながら、其の教育に就いての第一巻、現存の「人間の教育」を書き終へやうとして、人間の人間たる所以のもの、「人間の本质、その神的本質」を實現せしむることに我等は專念すべきである、そして、そこに至る「道」方法を證示し、而して其れを實生活に日常の現實の中に導入するこのために、本書の續篇および本書の著者の生涯は獻げられてゐる」(レクナム版「人間の教育」四五六頁)さいふ意味のこゝを記してゐたフレーベルを(一八二六年刊)其れは實現されずに終つたのではあるが、併せて想起し記念したいのであります。

眞の智慧を愛するために嘗て「カントに歸れ」さいふ聲を聞いたやうに、保育、教育に關して「フレーベルに歸れ」さいふ聲があるやうであります。少くも幼児については、此の聲が其の眞義を鮮かにしつゝ、もつゞ／＼あげられることを、心から望みたく思はずにはをれないのであります。フレーベルも歴史のなかの一頁の人で確かにあります。しかし其れゆゑまた歴史的的地位をもつて永久に輝いてゐる大いなる星として、今の私達の脚下にも指導的光を現におくつてゐるのであります。何氣なく日々の保育に、無心に熱心に、幼児に一切をさゝげて當つてゐて下さる方々の其の保育のさなかに、「まごころ」を以て眞理として、フレーベルの魂が現に生きてゐてくれるのを見ます。それゆゑまた、「まごころ」「眞理」を以てのフレーベルを、脚下の心裏中より靡き出しあつてゆきたいを念願するものであります。さういふ記念のよすがにも、フレーベル先生に聴くこゝろで、二三、「人間の教育」から讀みあつてゆきたく思ひます。いろ／＼な意味、見地

から、いろいろに拾ひ讀んでみたいのでありますが、「拜み出す保育」いふ立場から——おもふに、さういふ立場が、フ
レーベルの根本精神を現はし得ると思ひますので——抄讀しあつてみることにします。

後に「恩物」を以て整へられるに至つたものゝこゝを述べてゐるあたりに

「人間の内なる精神を自分の外にむかつて、素材に於て、また素材を通じて表出しやうとするには、人が物體的空間的
なるものを精神化するこゝから始めねばならぬ、すなはち、さういふ空間的物體に生命を與へ、精神的なる關連を意義
を與へるこゝからして始めねばならぬ。」
(三五四頁)

さういふ意味のこゝろがあります。物として形をなしてゐる物體的空間的なるものに「生命を與へ」、諸物として命無きかに
バラ／＼に在るものに生命を與へ、精神的連絡を統一を現はさしめてゆくこゝを、小供をしてなさしめよう、人間とし
ての子供をしてなさしめやういふのであります。すなはち、フレーベル風にいへば(後に引く巻頭の數節を参照されたい)本
來存する精神、物の中にも存する精神を、眞に發現せしめやうと念願するのであります。そのこゝを人間としての幼児を
して、若しくは幼児を通じて現實ならしめやうと念願するのこゝを、さう念願し、さう努めつゝあるフレーベルにまつて
は、子供は、幼児は、まさしく天地あめつちの法の中にあつて、其の天地の法を實にするこゝに參すべき、尊き存在にして、まづ
拜まれてゐるのであります。かういふフレーベルの拜み方は、初期のものにしての「人間の教育」にしても、後期のものに
しての「母の歌を愛撫の歌」にしても、其の至る所に見らるゝこゝろであります。技を單なる理窟であるかに思ひなざる
ゝこゝろ無きにも非ざる恩物關係の箇所に、その裏を流るゝフレーベルの心を感じたく、こゝをぬいてみたのであります。

ついでながら、「恩物」は良い名であると思ひます。恩賜のもの、ありがたくも贈られたもの、さういふ心が殊に

りだされてみて、一應は熟さぬ言葉のやうでありながら、良い名であると思ひます。原語では *Game* になつてゐます。それを「母の歌を愛撫の歌」の譯者は、原語原文の獨逸的感じを全體として出して下さりながら、「贈物」を譯してをられます。

遊びに就いて述べてゐるところに次のやうな言葉があります。

遊ぶあそぶといふこと、遊びあそびといふものは、子供の發達、すなはち人間の此の時期における發達としては、最高段階に屬するものである。こゝの遊ぶは、遊びは(子供、若しくは人間の)内部を自發的に自由に表出したもの、すなはち内部そのものの必要を必然性からして生じた内部表出だからである。そのこゝは遊びといふ言葉そのものによくあらはれてゐる。

遊びといふものは此の時期に於ける人間の最も純粹なる精神的所産である、同時にまた、人間生活全體の既往及將來の映像であり、人間及萬物中に存する、內的なる、秘められたる自然の生命の、既往及將來の映像である。(七五頁)

「遊ぶあそぶといふこと、遊びあそびといふもの」の重要な意義は既によく知られてゐるこゝであります。こゝの數行から私の讀み取りたく思ひましたのは、「遊び」は——ついでながらですが、「遊戯」と云つてしまつてもいゝのでせうが、今私達の周圍では然う言ふと一種の型が聯想されすぎるので、原文で、動詞形の名詞と名詞形の名詞とをつかつてるのを、そのまゝ置き代へて、しかも「遊ぶあそぶといふこと」とか「遊びあそびといふもの」とかわざと云つてみました——その「遊び」は、人間としての生活の全體を現はして(表出して)ゐる、しかし「既におくつたところのもの」「こゝからおくらうとするもの」を映像的に現はしてゐる、こゝのこゝであります。しかも讀みすぎかもしれないと思はぬでもありませんが、たゞ單に「人間の一生を練りかへすものだ」といふよりか、フレールフロアのいはゆる「人間性そのもの」もしくは「人類性そのもの」、かくありたい、あるべきものを、こゝして、求め、

えがき、たてられたところの一つの人間性若しくは人類性の理念としての Menschheit そのものが、無心なる幼児を通じて、(あのギリシヤの底知れぬ麗しき深き海の中より神々しくも美しいヴィナスの生れ出づるが如く)現はれ出づるのを、敬虔に拜し待たうといふ氣持が、少くもフレーベル的にはそこに含まれてゐると思ふのであります。すなはち、子供といふものを本當に拜するが如く尊重しつゝあることを、行文の底に感じらるゝのであります。また、いまひこつ讀みこりたく思ひましたのは、「人間の中には、固より、あらゆる物の中に存する自然の生命がおのづから現はれて来る、すなはち(後に云ふ巻頭の數節のところを是非参照していただかねばならぬのであります)此の天地の間に存する「精神」が眞に精神として實存するためには、「もの」を以てしての「自然」を以てしての「精神」を、一つにするものたる「人間」によつてであり、「人間」を通じてあるが、さういふものを以てしての人間の子供、無心なる人間としての子供の、無心なる、しかし内部的な要求を必然性の中にそとろうごかされながらする、止むに止まれぬかたちの遊びにおいて、「自然の生命」が現はれ出で、来る、といふことあります。すなはち無心にして物言はぬかたちの幼児を通じて、天地の法が實にされるといふことで、子供の生活を拜し扱はうとする態度のことであります。

よく御存じの、「人間の教育」の巻頭のところに、次のやうな、創成記のおごそかさをもつ數行があります。

「あらゆるものの中に、一の永遠なる法則が、安らひ、活らき、ゆきわたり支配してゐる。それは、内界すなはち精神におけるおなじく、外界すなはち自然のうちに、しかうしてまた、此の内外兩者を一如のものたらしむる生のうちに、恒におなじく明らかに、また定かに、顯はれてゐるのであり、また顯はれてゐる。(中略)

「かくいたるところに徧くゆきわたり支配せる法則の根柢には、必然、一のいたるところに活らき、自明にして生々たる、

自覺的にして、したがつて永遠に實在せる統一が、横はつてゐるのである。(中略)
 「此の統一が神なのである。

あらゆるものは此の神的なるもの、神より出で、をり、而してひきつびきつに此の神的なるもの、神によつて制約せられてゐるのである。神の中にこそ萬物の唯一の根柢は存するのである。

あらゆるものゝ中に、神的なるもの、神は、安らひ、活らき、ゆきわたり支配してゐる。

あらゆるものは、神的なるもの、神の中にあつて、安らひ、生き、成り立つてをるのであり、また、そのもの、神を通じて、しかなつてゐるのである。

萬物はたゞ、その中に神的なるものゝ存し活らけることによつてのみ、存在するのである。

かく各々のものゝ中にあつて活らける神的なるものこそ、各々のものゝ本質なのである。(三〇頁)

ちよつとごきりつきづらゐる所ではありますが、フレーベル精神の眼目であり、まさに要領、すなはち其處をさらふれば他ののづからにして把握し得るごころであるご思ひます。私が假りに「拜み出す保育」ごいふ言ひ方にして表はしてみたフレーベル精神は、すべて此處を根源として、今も生きてゐるご思ひます。

こゝを思想的背景からして領解することは研究的に大切なことではありますが、それはそれとして、今こゝでは、無心になつて、まさにフレーベル先生に聴き入りたのであります。先生はまづ言はれます。

一つの法則、法が天地を貫いてゐる、其れは精神のうちにはもごより、自然のうちには、そしてまた、精神をして自然に於て眞に精神たらしめ、自然をして精神によつて眞に自然たらしめつゝ、その兩者を一にしゆく人間の生のうちには、太初より存し、今も現に存し顯はれてゐる。

いろいろなる誤解の妨げから自由になるために、「法」^{のり}といふ言葉を想ひ浮べながら、心空しく眞澄みの秋空に觀入るころで讀みかへし讀みかへししてみたいと思ひます——まづ「法則」、「法」^{のり}と言ひながら、フレーベル先生は如何に苦心して天地^{あめつち}と其のうちなる物の實相との前に我々を連れていかうとして下さるか、そして、種々なる躓きなく、素直に其の「法そのもの」に觸れさせるために、

其の法の支配の根柢には、必然、一の統一がなければならぬ。

ミ、我々の心に入れて下さりながら其れを領得せしめてくれようとしてをらるゝか、そして、用意深く我をこゝまで連れて來て下さつてから

其の統一が即ち神なのである、

と言つてをられます。そして正に創世記のおごそかさ^をを以て、諄々ミ、敬虔に斯う言はれてから、人間の教育の根本原理を我々のまへに展示してくれるために、

あらゆるものは此の法^{のり}そのもの、こもいふべき神的なるもの即ち神^{より}より出で、

いな、其の法^{のり}、神の中に在つて、其れは包まれ、生かされ、其れによつて動かされ、成らしめられつゝ在るのである。ものゝ、そのものたる所以の本質は、まさに此の神的なる法、神こそ、其れである。

ミ、我々の守り育て、引き出すべきものたる人間の本質^ミ、それに如何に對すべきか、すなはち拜み出す如くに對すべきことを、フレーベル先生は、敬虔に、諄々ミ我々に今も教へて下さるのであります。(ホンの抜き／＼しか讀みあはなかつたのでありますが、こゝだけは、原文的に、苦勞しても讀んでみねばならんミ、心から望まれます、こゝいふのは單なる思想^ミ、こゝいふよりか、こゝの言葉を通して、すなはちフレーベルを通して、納々ミ眞理が現はれてる、己れ自らを、眞理

が語つてゐるさいふ氣がし、しかも、洪大なる眞理が不束なる器としての言葉を辛うじて借りながら語り出でゝゐるさいふ感じで、したがつて、其の訥々たる言辭の間より洩れ來る生々たるものに直接したいからであります。

「拜み出す保育」をしてのフレーベルの心を抄讀してみたい所はまだ幾つもあります、長くもありませんから、これだけにするさしまして、兎に角、かういふコツで讀んで行くならば、「人間の教育」は、フレーベルのものは、本當に我々の今の脚下に指示の光を投げて、我々を深め高め、我々をして眞に我々の仕事にふさはしく生かし、力つけてくれると思ひます。そして聽きます時、

我々は子供から學ばうではないか、子供等の生活が我々に氣づかせ、識らしてくれることを、我々はよく耳傾けて聽かうではないか、子供等の和らかきこゝろが、しづかに求めつゝあるこゝろに、度しく耳傾けつゝゆかうではないか、我々は、子供のうちに、子供にも、生きやうではないか、さうするならば、子供等の生活は我々に、安らかさ喜びを齎してくれるであらう、そして然うするこゝろによつてはじめて我々は聰くなり、聰あるこゝろになるであらう。

(一―二頁のあたりの大意)

さいふフレーベルのこゝろを、耳のそばに、心にしみて聽かされるやうに思ひます。

ついでながら、右の大意のこゝろに、「我々は子供のうちに、子供にも生きやうではないか」、こぼれてみたこゝろは、今墓碑銘ともなつてゐるさいふ有名な言葉

Kommt, lasst uns unsern Kindern leben!

さいふ言葉に當るものでありますが、これに就いて英譯者ヘイルマン氏(英譯書八九頁) Come, let us live for our

children を譯してから、面白い註をしてをられます。すなはち、原文の unsem kindern は第三格で「我々の子供等」「た」でも云ひませうか——英語の前置詞では、即ちつゝましく心こめて、子供等にうちこんで「た」でも云ふ意味を、即ち「子供等の中に」吸ひこまれて、夢中になつて「た」でも云ふ意味を、with 即ち「子供等と共に」、一つになつて、融けあつて「た」でも云ふ意味があるのであると言つてをられます。フレーベルもほゞえみながら、肯いてくれるかもしれない註であると思ひます。(琵琶湖畔における保育研究会席上の講話の意を記す。十月十一日京都)

會 告

本會發行「日本の旗」日の丸の旗に就ては多大の御支援を感謝します。就ては豫告の通り、その賣上金額として、金壹百圓也を不取敢獻金いたしました。之れは御購入下さつた各位の御獻金に他ならないのでありまして、此の段御報告申し上げます。尙ほ引きつゞき御支援願ひます。

昭和十二年十二月

日本幼稚園協會

クリスマス・ツリーと スミ子さんのお話

1

武 田 雪 夫

さあ、今から、クリスマス・ツリー・ミスミ子さんのお話をしませうね。

そら、クリスマス・ツリー・ミいふのは、ご存じでせう。クリスマスの時、お室に立てて、色んなおかざりをする青い木のことですな。

ある日のこと、スミ子さんは、

「ねえ、お母さま、今日でせう。クリスマス・ツリーを立てて下さるのは今日でせう。」

さう言つて、お聞きしました。

さうするに、お母さまは、

「さうですよ。今日、これからお晝のご飯をすましたら、大通りのお花屋さんへ、買ひに行くのですよ。他のお買物もありますけれど、スミ子さんも、つれて行つて上げませう。」

さう、おつしやいました。

スミ子さんは、大よろこびで、おこなくお晝のご飯を頂きました。

さあ、それでは、お買物に出かけませう。

「ねえやさん、行つて來ます。お留守をたのみますよ。」

さう言つて、お母さまは、スミ子さんとお手手をつないで、大通りの方へ歩いて行きました。さあ、それでは、まづ一ばん先に、お花屋さんへ行きませう。

お花屋さんには、クリスマス・ツリーが、さつさりさつさりありました。ツリーには、チカチカミがつた細かい葉ツばが、一めんについてゐます。

スミ子さんは、

「クリスマス・ツリーつて、松の木みたいですよわね。」

さう、お母さまに言ひました。

すかさず、お母さまは、

「ええ、ほんごにさうだね。でも、これは松ではありませんよ。これはドイツ唐檜さうひといふ木ですよ。」

さう言ひながら、お手ぶくろをはめたままのお手で、ツリーを引出して、あれやこれや、色々ながめでいらつしやいましたが、

「それでは、これにしませう。これを、あまで届け下さいな。」

さう、お花屋さんに言つて、お金をおはらひになりました。

「ツリーには、根のついてゐるのよ、根のついてゐないのよ両方ありました。お母さまのお買ひになつたツリーには、根があつて、黒い土が少しついてゐました。

スミ子さんは、

「お母さま、さうして、根のあるツリーをお買ひになつたの？」

さう、お母さまにお聞きして見ました。

するよ、お母さまが、おつしやいました。

「この木はね、クリスマスがすんだら、お庭におろして、植ゑておくのですよ。さうするよ、來年は、これよりも、すつと大きくなつてゐるでせう。」

スミ子さんは、それを聞くよ、うれしくなつて、思はず、

「まあ！」と言ひました。

スミ子さんよ、お母さまは、お花屋さんを出るよ、こんごは、お菓子屋さんへ行きました。そしてスミ子さ

んの大きなお菓子を、さつさり買つて頂きました。それから、お洋服屋さんや、お肉屋さんや、方々のお店によつて、たくさんお買物をしてからお家へ歸りました。

2

お家へ入らうとするに、お玄關のところに、もうちやんこ、さつきのツリーが持つて來てありました。

お母さまは、お家の裏の方から、大きな植木鉢を一つ持つて來て、きれいにお洗ひになりました。そして、クリスマス・ツリーを、その中へ上手にお植ゑになりました。少し土を入れて、ぐらぐらしないやうに、ちやんこお植ゑになりました。そして、スミ子さんのお室のまん中にお置きになりました。

それから、お母さまは、にっこりして、

「スミ子さん、今にお父さんが、きつこ、よいものを持つておかへりですよ。」

さう、おつしやいました。

スミさんは、すぐに、お聞きしました。

「なアにっやちものつて。」

お母さまは、やはり、にっこりしながら、

「ちやんこものつてね、それはそれは、よいものなのですよ。」

さう、おつしやいました。まあ、ほんごに何でせうね？それはそれはよいものなのですッて。

スミ子さんは、一寸考へてゐましたが、

「——ああ、わかりましたわ、わかりましたわ。」

さう言ひました。お母さまは、

「さう、ちやあ、あててごらんなさい。」

「あのね、あのね。このツリーに、おかざりするものでせう。キラキラのお星さまや、鐘や、それから……

……………。」

「ええ、さうですよ。今日はお父さまが、きれいなおかざりを、さつさり買つて来て下さるお約束なのです
よ。」

スミ子さんは、それを聞くに、ほんたうにうれしくなつて、

「まあ、みんなに、きれいでせうね。ほんごに、うれしいわ。」

さう言つて、おさなしく一人で遊んでゐますと、だんだん夕方になつて來ました。

おや、お玄關の呼鈴です。

スミ子さんは、

「ああ、お父さまよ。きつち、お父さまよ。」

さう言ひながら、お玄關へ飛出して行きました。お母さまも、出ていらつしやいました。ねえやさんが、お玄關の戸を開けて見ましたら、やつぱりお父さまでした。

スミ子さんは、よろこんで、大きな聲で、

「お父さま、おかへりなさい。」

さう言つて、ごあいさつをしました。そして、

「あの、クリスマス・ツリーにおかざりするものは、買つて来て下さつたの？」

さう言つて、お聞きしました。

するさ、お父さまは、お首を振りながら、

「はいはい、只今。そら、きつさり買つて來ましたよ。」

さう言つて、お靴を一しよに抱へていらした、紙に包んだ四角な箱を、スミ子さんの手に渡して下さいました。

スミ子さんが、開けて見るさ、箱の中には、クリスマス・ツリーにおかざりする、きれいなものが、一ぱい

入つてゐました。

スミ子さんは、うれしくなつて、大きな聲で、

「まあ！」と言つて、すぐに箱の中のものを出して見ました。

——キラキラ光つたお星さまや、小さな鐘や、かはいいサンタクロースのお人形や、太い四角な煙突のついた小さなお家が出て來ました。それから、赤や青の、きれいな小さなお蠟燭や、いろいろな色のお紐のやうなものが、ごつさり出て來ました。

晩のご飯をすすすゑ、スミ子さんは、お父さまやお母さまにご一しよに、ツリーにおかざりをつけはじめました。

ツリーの一番高いところへ、一ばん大きなお星さまをつけました。それから、枝の先の方へ、サンタクロースのお人形や、煙突のついたお家を、一生けんめいに結びつけました。

お母さまは、むかふのお部屋から、白い綿を持つていらつしやいました。そして、少しづつちぎつて、青いツリーの枝のあちらこちらへ、おのせになりました。さうするに、ほんたうに枝の上へ、雪が降つたやうになりました。

お父さまは、赤や青のお紐のやうなものを、あちらの枝から、こちらの枝へダラダラミかけまはしていらつしやいました。

スミ子さんが、

「それ、なめたっ」

さうお聞きします、お父さまは、

「これはね、モールのつかひのすまよ。」

さう、お答へになりました。

4

そら、もう、これで、すっかりきれいにおかざりが出来ました。

スミ子さんは、大よろこびで、にこにこしながら、きれいになつたツリーのそばに立つて見ました。

さうするに、お父さんが、

「おや、スミ子のせらの高さは、このツリーと、ちやうど同じ高さです。ほら、ね。」

さう、お母さまにおつしやいました。

すから、お母さまが、

「ほんに。それでは、來年は、ツリーミスミ子と、どちらが大きくなるでせうね。この次のクリスマスまで、大きくなりつこの競争をするのですね。」

お父さまが、また、笑ひながら、

「お庭に植ゑておいたら、きつぎ、ツリーも、ずんずん大きくなるから、スミ子も、まけずに大きくなるならなくて駄目ですよ。」

をり、おつしやいました。

さあ、それでは、來年のクリスマスまでに、ごちらが大きくなるでせうね。

そら、お家の中のスミ子さんも、お庭のツリーも、ごちらも、ぎんぎん大きくなつて行くでせう。まあ、ほんごに、ごちらが勝になるでせう。

はい、それでは、このクリスマス・ツリーミスミ子さんのお話は、これで、おしまひです。

新刊

倉橋惣三作詞
小松耕輔作曲

戸倉ハル振付

日本の旗 日の丸の旗

色刷表紙四六倍判音譜及び振付
説明
定價送料共一冊 金參拾錢
前金(振替或は參錢郵券)を添へ
冊數及び送先き明記申込次第直
に送本す

此の時局、幼兒兒童に何を唱はせませうか。どんな遊戯をさせませうか。本會は、今日此の新しい唱歌と遊戯とを全國の幼兒兒童の前に贈り得ることを最も欣快とするのであります。願はくは、皆さまのお力添へを俟つて、幼稚園に、學校に、家庭に、街頭に、津々浦々に、此の唱歌遊戯の流布を見るに至り得んことを。之れが本會の遠慮のない望みであります。

尙、此の刊行によつて得た金額は、國防費に獻金致したく、既に金百圓を獻金致しました。どうぞ此の趣旨にも御共鳴下さつて、尙ほ一冊でも多くお購求下さい。又廣くお勧め願ひます。一冊の御購買は即ち同時に國防獻金となるのであります。若し各幼稚園が此の意味に基いて、取りまごめて御注文下さるようのごまごまごして頂ければ、此の上ない幸であります。そのために表紙も美しい色刷りの家庭向きにして置きました。右本會の二つの希望を御協賛願ひます。

發行所

日本幼稚園協會

東京市小石川區大塚町三十五

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

振替口座東京一七二六六番

第二回幼児童話募集

株式會社フレール館創業三拾周年記念
保育研究資金による懸賞募集第三回

募集規定

應募作は幼児に適する童話たること。
主題、内容、長短は隨意。

わけても子供の生活を取り入れたもの、又各地の地方色の描き出されてゐるものが望ましい。
幼稚園、託児所保母諸君の自作たること。(舊作にてもよろし)

應募篇數任意。
原稿紙にペン書のこと。

應募者は宿所、氏名(誌上匿名隨意)及び奉職園の名稱所在地を明記のこと。

日本幼稚園協會(東京市小石川區東京女子高等師範學校附屬幼稚園内)童話募集掛宛のこと。

締切 昭和十三年二月末日

發表 昭和十三年六月十五日本會發行の「幼児の教育誌」上。
入選作は本誌に掲載し、賞状及賞金を贈呈します。

フレール賞

一等一名金參拾圓 二等一名金貳拾圓 三等一名金拾圓
選外佳作拾貳名(賞品贈呈)

審査(五十音順)

小川 未明氏 岸邊 福雄氏 倉橋 惣三氏

久留島 武彦氏 新庄 よしこ氏

原稿は一切返却しません。

尚御不明の點は往復はがきで本會童話募集掛宛お問合せ下さい。

謹告

先般、株式會社フレール館社長高市次郎氏より、同館創業三十周年の記念として、左記の通り、保育研究資金を全國保育界に對して提供せられ、その適切なる使途につき本會に委託せられました。我國保育界のために誠に欣慶事であります。就ては、本會はその資金を保管致すと共に、特に實行委員諸氏を御依頼し御協議を願ひました結果、先づ第一案として、保育上切要なる研究課題を設け、全國幼稚園並に託児所の保母諸君の御應募を乞ひ、此の資金を以て其の賞に當つることにになりました。その課題は順次に各方面に互ることにし、その方面毎に權威ある審査員諸氏の厳正なる審査を経て贈呈し、その賞をフレール賞と名づけることも御相談ありました。

一金壹千五百圓也 保育研究資金

昭和十二年四月十二日

株式會社フレール館 社長 高市次郎

右御披露と共に、全國保育界諸賢が奮つて此の計畫に御贊同御援助下さるやう切に願ひいたします。

昭和十二年十二月

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

日本幼稚園協會

實行委員(五十音順)

青柳美智代氏 朝原梅一氏 及川ふみ氏

兼信 學氏 岸邊 福雄氏 菊池ふじの氏

倉橋 惣三氏 新庄よしこ氏 高崎 能樹氏

田島 眞治氏 土川五郎氏 和田 實氏

おはなしの道に我が友を得て

大塚 喜 一

保育修了を前にして子供たちの求めてゐる「おはなしの世界」に没入することに、お互に別れて後も永遠に心に宿る清新な印象を感得したいと切望してゐた本年二月下旬、神戸の塚田喜太郎兄が近日入浴せらるゝこの事を耳にした小生は、この好機に是非兄のお話から親しく學びたいものゝ早速「お話の交換發表」を申込んだ。そして三月五日午後〇時半、京洛の大自然の恵み豊かな「ゴドモノイエ」にて兄と相會するを得た。兄の令名は前から存じ上げて居り會等で御目にかゝつた事はあつたが、お話を參觀したのはこれが最初である。この日小生は先づ「お月様いくつ」を話して自己紹介をした。兄はその後を極めて自然になだらかに受けて「四足で匍ふものは何か？」との問答からおはなしを發生させて行つて「お猿さん」の話の子供の遊びの中

に語られた。こゝに始めて小生は兄獨特の「談話」を實地に觀、子供の心の動きが言葉と筋肉運動とを通じて刻々に躍如として現はれて行く姿に深き感興を起さざるを得なかつた。それは恰も、今迄小生が「子供と語る」中に子供と話者との兩者俱なる心の動きとしてねらつてゐたところを、その中味に形體を具へさせて眼に見えるやうにして呉れたものであつた。

『談話法』と題せられたる兄の所説は雑誌『幼兒童話』に『いとし兒』に本年八月頃より連載されつゝあるから是非御讀み下されたく、それによつて學ばるゝ所を日常の保育に實踐せらるゝ中にこの稿に披瀝せむとする微意にも漸次御共鳴下さる事と信ずる。現今の幼稚園のおはなしの一般の情勢に兄の説かるゝ「談話法」が如何に必要にして適切な

る指針を與へらるゝかをこもかくも先づ知つて頂きたさに、兄の所説の一部を轉載して御紹介すれば

「童話法」は一言にして申せば「お噺を如何に完全に、幼児に傳へるか」の問題の研究であります。

處が「談話法」に於ては、「如何に幼兒に完全に語り合ふか」が、その根本目的であるのです。

此處に、その理想、その方法に於て、格段の違ひが生ずるに、その幼兒に及ぼす效果に於ては非常な差を生じるのであります。

「如何に聞かすか」これは幼兒童話の目標であります。

「如何にしやべらすか」これが談話の理想であります。(「いし兒」八月號三七頁より)

こにもかくにも、幼兒教育上、如何におしやべりが大切なものであるかを知つて頂くに、如何にこの大切なおしやべりが母親や保母達により抑壓されてゐるかを知つて頂きたいのです。そして「談話」なるものは、この幼兒のおしやべりの上に立脚して、これを指導し、これ

を訓練する方法である事を知つて頂き度いのであります。(「いし兒」九月號三五頁より)

三月中に今一度相會したきものゝ願つてゐたがお互に多忙の爲その機を得ず、年度改つて四月二十三日朝、堀川幼稚園で「桃太郎」のお話を聴く事を得た。其頃小生は拙稿「お話の深さ」(「話方研究」第十三卷第六、七號所載)を近頃経験した話者としての心の動きを反省して書きつゝあつた時であり、殊にその前日二十二日の午後は日彰幼稚園の二ヶ年保育年長兒の求めに應じて自由な形態でお話すること再度その後直ちに時を愛惜してその二度目のお話の特別の印象(後説十月十五日の記録参照)を書きこめたりしてゐた事にて、兄との再會を得る事喜に耐えず、會ふなり「君はお話してゐる時、聴いてゐる子供達がいつもよく見えてゐるか」ミ、話しつゝ爲さるべきお話の統制に就て小生の當時苦心せる點に就き意見を求めた。兄は直ちにこれに答へて「僕はお話の内容は話してゐる中に樂に自然に心に浮び言葉態度に出るもので、それをその場その時の子供達の動きに應じて調整統制しつゝ話して行くのである」ミ説明せら

れ互に語り合つてゐる中に子供達が揃つて「桃太郎」のお話が展開される。成程かうした問答を本位として進行して行く「談話」であるから話す者から聴く者へのみの所謂「童話」に見出し得ざる自他相呼應して進展する刻々のその場その時の動きが、單に心理的にのみならず事實眼に見えて、何人にも明瞭に觀取せらるゝ譯である。

この日の午後小生が當時執筆中の拙稿の特に心を用ひし要所（話者の語るおはなしがこれを聴く子供達の心の動きとなつて感應して行くこと、そのお話が眞實子供の心にひびく様になるまでの話者としての修練と内省等）を讀みつゝ語り合つた事は、お互の苦心を知り正しき方向態度を求めて俱に進み行かむとする新しき前途を豫告する最適の好機であつた。こゝに同じ道の友を得べきよろこばしき希望を見出した小生は、その後兄と相會する機會を出來得る限り見逃がさぬ様更に自發的に作るやうにした。斯くして我等二人が會へばそれが街路車中屋内等何處であらうとすぐ小生の云ひたい事聞きたい事話を始め次々質問の矢を向けて目指す方向へぐんぐん話を切り込んで行き、より

根本へ、こゝお互の思念を深めて行く様にした。このあつかましい態度に兄はいつも快く應答されて小生の求むる所に兄の背景廣い智見と體驗とより醸成さるゝ産果を常に滋味豊かなる收穫として受用し得る様に惠與せられた。それに喜び感謝しつゝ話を進めれば進める程、我等は喜愛を共にし念願を同じうする事が益々明確に切實に感ぜられて來た。

或は京津國道を走る車中より秋晴の風光を眺めつゝ都市の幼稚園兒の健康の寒心に耐えざる點に憂を共にし大自然に接する教育の人間以上の偉力に就き互の見聞を語り合ひ、或は琵琶湖上を行く船の上で舳に碎け散る浪の音のリズムにいつしか同じ心を以て共に耳を傾けつゝ環境からうまれるお話の世界に思を走せ、或は一保姆の苦心談に應答せられしに互の關心を喚起せられて夕暮近き靜かなる川邊を逍遙し會談しつゝ子供の訴へを眞にきゝわけ得る保姆には如何なる特殊幼兒にもその子の實狀に順應して保育の正道の見出さるる境地に歸一する等、所を變へ時を異にして兩人の會話は保育全般に擴充され人情世態の機微に及んで興味いよゝ深く互の感應共鳴は更に新しき話題を産み出して

行く。或は沈黙黙想する時あり、或は快談高笑する時あり、而して歸する所は平凡の中より非凡の創作さるゝ眞理の道の發見であり、『要するに子供達はよくお話を聽いて呉れるものだなあ』この深き感懐を俱にする事であつた。

以下兄と相會した日とお互に參觀するを得たお話の経過を列記すれば次の如くである。

月 日	話 材	場 所	話 者
七月二日	芳夫さん	大阪集英幼稚園	塚田兄
同	お月様いくつ 芳夫さん	愛珠幼稚園	大塚塚田兄
七月七日	芳夫さん	南大江幼稚園	同
同	同	ランバス幼稚園	同
九月十七日	お月様いくつ 同 芳夫さん	下福島幼稚園	大塚塚田兄
九月三十日	お猿さん	船場幼稚園	同

(この日の午後、同園保母さん方と兄を中心に語り合ふ。詳細後記)。

十月一日 芳夫さん 堺第三幼稚園 塚田兄

同	桃太郎	殿馬場校(一、二年生)	塚田兄
同	芳夫さん	私立堺幼稚園	同
同	同	堺第一幼稚園	同
十月八日	水かめ 象ミ鼠	須磨早緑幼稚園 (塚田兄主事)	大塚塚田兄
同	同	同	同
同	豆の兵隊 豆太郎	神戸幼稚園	大塚塚田兄
十月十一日	母の會講話	瀬田基督同胞教會	塚田兄
十月十四日	芳夫さん	京都生祥幼稚園	塚田兄

(保育科一、二年生參觀に引率)

お話の後、實地に就き解説を乞ふ)

十月十五日	桃太郎 水かめ	京都豊園幼稚園	大塚塚田兄
同	芳夫さん	楊梅幼稚園	塚田兄
同	同	同	同
同	象ミ鼠 水かめ	神樂丘コドモノイエ	大塚塚田兄

(右の後 同所にて母の會講話)

十月十六日	黄金丸	京都YMCA子供會	塚田兄
-------	-----	-----------	-----

(同夜七時より同所にて『塚田兄を圍む會』に集る同好の友約十名、前日楊梅幼稚園にての驚くべき事實に就き

兩人より報告の後互に語り合ひ、續いて兄の幼稚園のおはなしの経験により發見せられ啓發せられたる所を聽く。

是等のお互の參觀、その前後の話し合ひには、おはなしを中心として保育全般に種々の所感經驗談等が交換されたのであるが、こゝにはその中最も印象深かりし事を述べやう。この事實の語る眞理を讀者の「おはなしの生活」に取り入れて頂きたいとの念願こそ小生がこの稿を記すに到りし最大の動機である。

九月三十日午後の會談に於て、塚田兄は次の如くその経験を發表された。

『お話中子供達が自由に言葉や動作で發表する事が許されその機會が適當にお話の進行に應じて配置(この用語を特に適切ならしむる必要を感じ塚田兄も熟考の上定む)さるゝ様にお互に話を運んで行く場合には、靜かに身體も動かさず一語も發せず聴く様に要求されさういふ習慣になつてゐる時の様な無理な疲れはない。従てその時間が少し位長くなつても幼児の心身の生き生きした常

態は保存擴充こそされ決して損傷せられず、その後他人がすぐお話をしてもよく出来る。人數時間に於て限度を守らねばならぬとされて來た。又さうである幼稚園のお話も、かうした自由な姿態の中に爲さるゝ時は少數長時間の理想的状態が或る程度迄人數が増し時間が延びてもよく存續し得る事を經驗した。

平生たゞ子供を行儀よく大人しく抑へつけてある幼稚園ほぎ、たゞひ少數であつても一度自由に發表させるに忽ち際限なくあばれ出して統制がつかない。反之、平生子供の生活々動に正常な満足はしめてのび々よく育てゝある幼稚園ならば、たゞひ大勢の子供達であつてもよくお話の流れに副ふて動靜宜しきを得る。』

これを聽いて小生は、今度は塚田兄の後を受けて話して見よう、そしてそうきいただけではわかりかねる事を自ら體驗したいと思ひそれにより兄の更に深き交りを見出し得る希望を胸に抱きつゝその機を待つてゐた。

果せる哉、十月十五日小生には思ひ出深き豊園幼稚園にて正しくその好機が恵まれた。

く子供達の最後列に近い横の位置に居たが、この突然の出
來事にさうなる事かきその場の情景の變化を一心に參觀し
てゐるさ、小生のすぐ前の子供の一人がこれに合唱しかけ
た、ミ見るや、其間髪を容れず、塚田兄は「蓄音器の中にも
ない」ミ蓋を両手で持つて上げる動作をせられた。しかもそ
れが極めてなだらかに反省の意識を交へず反射的自然で、
むしろその子供達の動きに副ふた言葉ミ態度だつた。それ
により注意の外れかけた子供も蓄音器の方はすぐ解消して
お話の中に歸つた。此間實に二十秒か三十秒位だつたらう。
あこは物理的に必要な最小限度迄聲を少しく大きくせられ
ただけで子供達の聴きぶりも話者の態度も今迄ミ變りはな
い。(あこできけば、兄には自分の聲がきこえないから、一
番後の子供がよくきいてゐる程度の聲にしたミ云つてゐら
れた)。レコードはお構ひなしに引續いて鳴つてゐる。今度
は「こゝはお國……」をやり出した。その歌の終る頃、昨日
兄ミ話し合つたときであつたこのお話中最も苦心してる
られる要所に來さうなのでこれで止めばよいがミ思つてゐ
たが、そこへ來る迄に一寸止んだだけで又鳴り出した。さ

ういふ事が二三度繰返されたが、子供達が動搖する様があ
しも見えなかつた。大切な苦心の要所を話してゐられる時
もレコードは鳴りづめであつた。物理的には實に大きな音
なのだから、それに心を奪はれない様にお話に心耳を傾注
してゐるさ、この嵐のたゞ中にあつて子供達が皆よくお話
に聴き入つて居り話者聴者一體の眞實景にある事が小生の
心底に銘して深く印象付けられた。そして最初あんなにが
ん／＼ミ耳に響いて堪え難い程に感ぜられたレコードの音
が心理的には次第に遠ざかつて行くの感があつた。この刻
々の進行の情景を心に印してゐた小生は、到底この場を離
れて妨害に注意する様な餘猶は無かつた。正直に云へば多
少それが心にかゝつてゐる時もあり、注意する必要はなく
しも一體ぎんなに鳴らしてゐるのか參觀事項中の一ミ
して見ておかうとした心のチラミ動かぬもで無かつたが、
事實この場の情景こそミてもそんな外部的なこミを注意す
る間のない充實したものであつた。斯くしてレコードはお
話の終る二三分前に止み、お話もやがてめでたく幕が降り
た。この出來事は團長にも大變御心配をかけたらしく、御

〔附記〕

この稿は昭和十二年十月十七日起稿し、二十一日午後こまで書き終り直ちに塚田兄へ速達にて送る。二十三日須磨の早緑幼稚園へ兄を訪ひこの稿の要所を中心に園長姉妹と四人で談論研鑽すること夜半に及び其後小生が再度轉寫清書して遂に今二十八日夕五時半に及びしものである。

しかも二十五日よりは兄の創案の紙芝居の新しい使命の發見せられしスバラシイ書信を頂くこと毎日、そのよるこぼしきニュースに躍動した小生は今朝神戸へ急行して兄に御都合願つてその實地を拜見、その色彩の明瞭構圖の簡素なるは「幼児と語る」二箇所を最も鮮かに見せて頂いた心地がして、洋々たる今後の進境を期待してゐる次第である。(一一、一〇、二八)

これは紙芝居といふよりも「イロエバナシ」と兄の命名せらるゝ如く、その色彩と構圖とによりおはなしが幼児の心に眞にふさはしく感受されて行く効果を助けその情調に和する様に出來てゐる。近日中にフリーベル館より發行さるゝ豫定であるから、その保育上のよさをわかつて活用し善用して頂き度く、それにより先生自身に幼児の心に和して語るおはなしの根本態度の修練さるゝ事と信ずる。尙その御經驗に基く御所感御批判等は今後の製作への助言として承り度く、作者の友人として特に御願致します。(一一、一六、校正の際追加)

丁寧な御挨拶を受けて園を辭するや小生は兄に、「あの大きい音の中に於ても子供達が如何によくお話を聴くか、その如實の姿をお蔭でよく參觀させて頂けた。大人の力でさうしてあゝして聴かせ得るものか」云へば兄は直ちに「そんな事は不可能だ、子供なればこそ聴くのだ」ミ力強く應答された。それ以上この場合、さすがに何も言へなくてしばらく沈黙の歩みを續けてゐるが、小生はあのレコードが鳴り出した時の間、一髪の際の兄の清明なる態度にこそ、このお話が終りまで兄の望まるゝ如く子供達の求むる如くに達成せらるべき根本が既に樹立されてゐた事に思ひ到り、兄の話者としての眞實の姿にしばし感涙をこぼめ得なかつた。『子供さへ我等の味方ならば、誰か我等を妨害せんや』とはこの日の參觀によつて會得せしめられた眞理であり、この一まきの忘れ得ざる印象こそは今後小生のお話をその根本の態度に實感に於て内より指導して頂ける事ミ感謝に耐えざる所である。子供ミ大人ミの眞に相合する所、それこそは神々人ミの相合する所ではあるまいか。

選外佳作の八

蚤と蝨と蟋蟀の
高飛び競争

幸 田 信 子

寒い／＼冬が行つてしまひ、「お日様に／＼日本晴」のお歌の様にボカ／＼本當に氣持のよい日が參りました。今迄寒くて、土の下にち／＼こまつてねてゐた色々のきれいなお花の芽がお目をさまし、お隣のお友達に、「暖かくなつた様ですからもうそろ／＼起きませうか」ミ御相談をして、お足を延ばし、お手を延ばし、思ひきり背延びをして土の上に可愛い頭を出しました。そして小さい葉を出しそれが大きくなつて、後から／＼澤山の葉が出て、そしてお花が咲いたものですから、お山や野原はミても／＼美しくなりました。そして蝶々が來て遊んだり、蜜蜂

が飛んで来てお花のおいしい蜜を澤山吸つたりして、本當に楽しさうでございました。それからお山や野原には櫻の花が一杯咲いて、そして散つてだん／＼暑くなつてさう／＼夏になりました。

するさ、この野原の真ん中に小さな新しいお家が三軒竝んで出来て、蚤／＼蟋蟀／＼蠸が引越をしてまゐりました。三軒は大變仲がようございました。そしてもつこよい事にはめい／＼のお家と同じ位の子供が一匹づつゐて、毎日仲よく飛んだりはねたりダンスをしたりお歌をうたつたり、それからお母様においしいお辨當を拵らへて頂いて、三匹でお山に遠足に行つたりして遊んでおりました。そして一度も喧嘩なましたことがありませんでした。

或時、三匹が集つて、いつもの様に遊んでをりますさ、蚤が

「もし／＼蠸さん／＼蟋蟀さん私達毎日かうして唯遊んでばかりゐてもつまりませんから、いつか一度誰が一番高く飛べるか高飛び競争をして見やうではありませんか。」

さ申しました。蟋蟀も蠸も喜んで「それは大變面白いでせう、それでは今度の日曜に朝十時からすることにしませう」「さ御相談がきまりました。三匹はお家に歸つてその事をお父様やお母様にお話してみましたら「それは良いことです、一生けんめいなさい」「さおつしやいました。日曜までには、めい五日ありました。三匹はさうにかして自分が一番立派に高く飛びたいさ一

生懸命お稽古を致しました。

いよいよ日曜になりました。今日は蚤ミ蠹蝨ミ蟋蟀の子供達の高飛び競争が有る云ふので、親類の蟲や近所の蟲等が朝早くから原っぱの入口にある運動場に集まりました。そして蚤や蟋蟀や蠹蝨のお父様やお母様は、子供達の一番好きな御馳走を澤山持つて應援に出かけました。そしてさうか一番勝つ様にミお祈りをして居りました。

あまりのさわぎに、蟲の國の王様は、何かあるのかミ不思議にお思ひになり、御家來にそのわけをおきゝになつて、「それは大變面白さうだから、私も一つ見物にゆきませう。そして一番勝つた者に澤山御褒美をあげませう。」とおつしやいまして、家來の者に色々のよい物を持たせ、立派なお車におのりになつてお出かけになりました。

おやさしい王様のお出ましを聞いて、皆の蟲共は大變喜び、お歌を唱つたりしておもてなし致しましたが、その中でも一番よろこんだのは、三匹の子供達のお父様やお母様でした。いよいよ十時になりましたので、競争がはじまりました。蚤ミ蠹蝨ミ蟋蟀は、今日は真白な運動服を着て王様のお前に出て来て、丁寧におじぎを致しました。それから「ジャンケンポン」をして蚤が一番勝ち、二番が蠹蝨で、おしまひが蟋蟀でしたので、その順番に一匹つつ飛んでみて、それを物指で計つて、誰が一番かをきめる云ふことになりました。審判官には蟻のおちさんが選

ばれました。黒いお洋服を着て、大きな物指を持つて出てまゐりました。

「用意——、ドン」で蚤が一生涯命飛びました。そして今迄にない程それは澤山飛びました。残念なここには、今朝おうちでお母様が、「澤山ごはんを食べてちからをつけてもらつしやい」こおつしやいましたのに言ふことをきかないで、ごはんを頂かないでピン／＼はねてばかり居りましたので、體がさても軽く、「ピン」さはねたと思つたらすぐ落ちてしまつて、餘りに早くて蟻のおぢさんは物さしで計るこゝが出来ませんでした。次に螽斯も一生懸命飛んだのですが、ゆふべお母様が「明日つかれるこいけませんから、早くおやすみなさい」こおつしやいましたのに、いつまでも／＼起きてゐて、中々ねませんでしたので、相憎／＼に来る途中に足が痛くなつて、餘り飛べませんべした。さあ今度は蟋蟀の番になりました。蟋蟀はゆふべも早くおやすみし、今朝早く起きて、ごはんもゆつくり頂いたので、少しも疲れてゐません。それで落ちついてしつかり元氣に飛んだので一番高く立派に飛べて、王様から澤山の御褒美を頂きました。そして「おまへはいつもお家の方の云ふことをよくきくさうだ。よい子ぢや／＼」こおほめにあづかりました。蟋蟀のお父様やお母様はごんなに嬉しかつたでせう。それから蟋蟀は螽斯や蚤に御褒美をわけてあげて、仲よくお家に歸りました。

選外佳作の九

森のお友達

中 村 全 江

お山の麓に大きな森が有りました。森には一年中青い草が茂つて、美しいお花が咲いて、美味しい木の實が一杯なつて、とてもきれいでした。

此の森の中には澤山の動物が住んで居ました。お鼻の長い象や、強いライオンや、首の長いキリンや、力自慢の虎や、賢い狐や、木登り上手なお猿さんや、お腹に赤ん坊を抱つこして走るカンガルや、それはく澤山の動物が住んで居て、毎日仲よく運動會したり、遠足したり、お話をしたりして、面白く遊んで居ました。

處が或る日の事、此の森に一匹の小熊がやつて來ました。今迄、この小熊の住んで居たお山は寒い寒い所で、一年の中の半分は雪が降つて穴の中に居らなければならぬのでいやでたまらなかつたのです。何ミかしていつも青い草の茂つて居る、木の實の澤山なつて居る處に行き度

いものだき考へた末、ひきりで行つて來たのでした。

高いお山をおりて、廣い野原を越えて、大きな川を渡つて、やうやく此の美しい森にたざりつきました。

森の入口には一匹の牛が心持ちよさ相に晝寢して居ました。

「牛さん、牛さん、私も此の森の仲間に入れてくれませんか」

と頼みました。牛はお晝寢の夢を覺されたと言ふ様な怒つた顔をして

「わしは知らんね——」

と言つて相手にしてくれません。

仕方ないので奥の方に入つて行きますと、今度は狐に出合ひました。

「狐さん、狐さん、僕を仲間に入れて下さい」

と頼みました。

「狐は遊んで欲しかつたら王様に頼むがい、」

といつてずん／＼行つてしまひました。

子熊は悲し相な顔をしてまた奥の方に進んで行きました。折角遠くの方からやつて來たのに

此の森の中の動物はだれも相手にしてくれませんので、今にも泣き出し相です。

しばらく行くに今度はカンガルに出合ひました。

「カンガルのおばさん、僕を遊んで下さい」

「頼みましたがカンガルは

「今赤ん坊が病氣で忙しいんだよ」

「言つて相手にしてくれませんか。ミウノ、小熊は泣き出して仕舞ひました。

小熊は泣き乍ら森を進んで行きます、後からだれか呼ぶものがあります。

「もし、小熊さん、さうしたのですか、何がそんなに悲しいのですか」

それは豚でした。

「はい、私は遠いお山から来たのにだれも相手にしてくれませんか」

「泣き乍ら言ひました。

「まあ、それは可哀想に……では私の家へいらつしやい。私の家には小豚も三匹いますから

「一諸にお遊びなさい」

「言つてくれましたので、小熊はよるこんで豚のお家へついて行きました。

豚のお家は森のはすれにあつて、狭くて、きたないお家でしたが、豚のおぢさんもおばさん
も子供達も、皆親切にしてくれますので、毎日喜んで遊んで居ました。けれど森に出るに森

の獸達が小熊をいぢめる計りして相手にしてくれません。

或る日子熊は森に木の實を拾ひに出かけました。澤山拾つた木の實を持つてお家へ歸らうとして居る處へ意地悪猿が出て來て、たうまうその實を取つて行つて仕舞ひました。小熊は泣く泣くお家へ歸りました。

豚のお母様が

「熊太郎さん、男の子は泣くものぢやありませんよ、さあ、おばさんが好い物をあげませう」
と言つて澤山の栗の實を出してくれました。

小熊は久し振りに大好物の美味しい栗を食べて大喜びです。それから小熊は餘り森にも出かけないで小豚と仲好く遊んで居ました。

森の獸達は子熊が此頃森へ出て來なくなつたので、一つ豚のお家へ出かけて、いぢめてやらうではないかと言ひ相談しました。

意地悪の狐や猿や狸や澤山のお友達を連れて、森のはずれの豚のお家へやつて來ました。

「やい〜弱蟲熊公出て來い〜」

お家のまわりを騒いで走り廻ります。豚のお父様もお母様も小豚も小熊もみんな家の中の穴倉の中にかくれてふるへて居ました。

ところが急にお空が暗くなつて来たかと思つたら大夕立が來ました。大粒の雨がざーつ降つて来て、大きな雷がピカ／＼ごろ／＼鳴り出しました。獸達は

「さあ、大變だ、どこかかくれろ／＼」

ミ探して見ましたが、かくれるところが有りません。豚のお家も戸が締つて居ますから入る事が出来ません。あわてゝ森の方に走り出しましたが、その中に大きな雷がピカ／＼ガチャンミ何かわれる様に鳴つたかと思ふミ、邊りが眞赤になりました。雷が落ちたのです。

その音が餘り大きかつたので、獸達はそこに氣絶してしまひました。

やがて雷も止んで獸達の聲もしなくなつたので、豚や小熊はそろ／＼ミ穴倉から出て來ました。

そつミ戸を開けて見ますミ、お家のそばには澤山の獸達が氣絶してたふれて居ます。皆驚いてしまひました。豚のお父様ミお母様は小熊や小豚に手傳はして大急ぎでお水やらお藥を持つて來て飲ませましたので、しばらくするミ皆やつミ息を吹き返しました。

皆同じ様に豚や小熊の親切を大層喜んで、それからは小熊を森の獸達の仲間に入れてやつて、仲好く遊んでやる様になりました。

豚のお家も森の中に美しい家を作つてやつて仲好くする様になりました。終

選外佳作の十

豚の旅行

藤崎　こ　し

豚のトン子ミビー子は汽車ボツボに乗せられて居りました。毎日、お母さんと一緒にのお家で、ピンクのお洋服で可愛い、尻尾シツポを振り、遊んで居りましたが、御馳走を運んで下さる小父さんが、今日は小さい新しいお箱を持って来て、「さあこのお家に這入るんだよ」ミトン子ミビー子を入れました。トン子もビー子もどういふ譯だかちつとも分らないで

「變だなく、ブー、變だなく、ブー、」つて云つて居りましたが、其の中ミ、汽車ボツボに乗せられたのです。

「何處へ行くのかしらあたし始めてよ」「私も」お隣り同志のトン子ミビー子がお話をして居りました、其れも其の筈、トン子もビー子も未だ何處へも行つた事がなかつたのですもの。

ビー、ボォーッ、ガッタンゴォーッ、大きな音と一緒に汽車が揺れて、ビー子もトン子もびつくり、ブーッくそれはく大きな聲を出しましたよ。

「あつ、動いた動いた 動き出したよ」ガッタンゴッコく、トン子とビー子のお體もガッタンゴッコく、さつき小父さんがちやんこお外を見る事が出来る様にお頭をお窓の方に向けて下さいました。トン子にもビー子の所にも四角いお窓があつたのです。動くく、木もお家も電信柱もふみきりも、「マラソンより未だ早いのね、いつかお母さんと一緒に見た活動寫眞の様ぢやない？」トン子もビー子も先に原つばで衛生活動をしていたのを遠くから見た事がありましたので思ひ出しました。

レールが何本もく敷いてある所を通りました。ずつこ向ふにも汽車がガッタンゴッコ走つてゐます。小さいお窓から人のお顔がごつさり見えました。

「あやし達を見てゐるのか知ら」

トン子もビー子も何だかはづかしい嬉し様な氣がしました。廣いく原つばの所も通りましたし、菜種のお花が一ぱい咲いてゐるお島も見えました。それから川がチヨロく流れてゐる所も通りましたし、大きな廣い川の上も通りました。それを見てもく皆珍しいものばかりで、トン子もビー子もよく見るのに其れはく一生懸命でした。

「うれしいのねブー〜」「面白いのねブー〜」

驛の所も通りましたけれど、トン子達の汽車はガツタンゴツコ〜走つてばかり居ります。

驛には美味しさうなものが澤山並んでゐるのが見えました。お山の間を通つたり、トンネルに入つたり又綺麗な景色が見えたりする度に、トン子も「ブー〜」ビー子も「ブーブー」

云ひました。いくつも〜の驛を通り過ぎて、トン子達の汽車は未だぎん〜走つてゐます。

「此の汽車はきつミ急行なのよ。だから小さい驛に停まらないのね」

「そうだわ〜ブウ〜」

「あゝお腹が空いて来た、何か食べるものはないかしら」

さう云つてゐる中に、ガツタンギーツミ大きい音がして、トン子ミビー子のお體も、ガツタンブウブウツ

「おやしまつた、ぎうしたのでせう」

「汽車の脱線かも知れない」

よく見るミ、そこは小さい〜驛でした。

停車場よ、小さい停車場ね、誰か乗るのか知ら、ギーツギーツ戸の開く音がしてトン子

の箱もビー子の箱もズル／＼ズル／＼動きました。

見るまゝ、青い服の小父さんが、二人で笑ひ乍らトン子ミビー子の箱を汽車から下してゐます。「何だあたし達が下りるのだわ」

トン子もビー子も遂々下されました。

「變だね／＼ブウ／＼」「變だね／＼ブウ／＼」云つて居りますまゝ、黄色い服のおぢさんが来て、トン子ミビー子の箱をリヤカーに乗せました。

今度は何處へ行くのか知らま思つてゐるまゝ、自轉車が動き出しました。

「おや動く／＼停車場もお家も、でも田舎の汽車はのろいのね」

トン子やビー子はリヤカーに乗せられても汽車だと思つたのでした。

向ふの方にはお山が見えますし、藁屋根のお家もあります。廣い／＼原つばの所に來ました。トン子もビー子も下されました。其處には新しい、トン子達が入るのに丁度よいお家があつたのです。トン子もビー子も箱から出されて其のお家に入られました。黄色い服の小父さんが笑ひ乍ら、お豆腐の粕ミ人參ミ交ぜた御馳走を持つて來て下さいました。トン子にもビー子にも大好きな／＼御馳走だつたのです。

小屋のかこひの所に、優しさうな坊ちゃんミお嬢さんが五六人こつちを見て笑つてゐました。

トン子とビー子は、何だか恥かしくなつて、細い尻尾をビクビク振りました。それから毎日、トン子とビー子は新しいお家で、綺麗な原つばやお山を眺め乍らたのしく過しました。

選外佳作の十一

蛙と螢

岡本千枝子

綺麗な小川に、小さな水車が廻つて居りました。その水車の側に、ちつぽけな、草のお家がありました。その草のお家には、蛙さん、螢さんが、仲よく住んで居ました。

いつも二人は、お夕食の御用意をする爲に、手提を持つて、市場に出掛けます。市場はズット川上の原つばにございました。

今日も二人は、お買物に行くために、螢さんは蛙さんに、一生懸命青いリボンを結んでやりました。蛙さんは螢さんに青いお帽子を被せてやりました。そして、おそろひの、真白いエプロンをかけて、手提を持つて、出掛けました。

いつものように川にそって、お話しをしながら、小石の上を歩いて行きます。メダカさんが川でお洗濯をしてゐました。

「今日は、随分お精が出ますね。」

「おや、誰かと思つたら、蛙さん、蝸さん、お買物ですか。」

「え、市場まで御一緒に行きませんか。」

「有難うございます。でも今日は何もお買物がありませんから、又この次に誘つて下さいね。」

「あらさうですか、では又次に、サヨウナラ。」サヨウナラ。メダカさんは又ジャブ〜とお洗濯をしました。

まもなく市場に着きました。市場は、いつ来ても賑かです。お友達、野ねすみさんにも、リスさん達にも逢ひました。蛙さんは、お薬賣りの蜂さんの處へ行つて、

「今日は蜂さん、お咽喉が少し疼いから、何かよいお薬り下さいな。」

「おや、いらつしやい。お咽喉が疼いですが、それは、お困りですね、そう〜三てもよく効くお薬がありますから、これを上げませうね。」

と言つて、甘い蜜の入つた貝を、手提に入れてくれました。

「有難うございました蛙さん。」

「有難うございました蜂さん。」蛙さんは、お薬屋さんから出て来ました。

螢さんは、赤や黄や青色の蠟燭が美しく竝んで居る、蠟燭賣りのてんこ蟲さんの處へいつて、

「今日はてんこ蟲さん。蠟燭がなくなつたから、青いのを下さいな。」

「あらいらつしやい。蠟燭がなくなつたのですか、それはお困りですね、青いのですね。」言つて、青い蠟燭を笹のはつばに、包んで手提に入れてくれました。

「有難うございました螢さん。」

「有難うございました、てんこ蟲さん。」螢さんは、蠟燭屋さんから出て来ました。

「蛙さんもうお買物すみましたか。」

「え、もうすみました、あなたは。」

「私もすみました。」二人は又同じ路を急いで歸りました。そして、お夕食を食へて、螢さんは青い蠟燭に火をこもして、水車の側の柳の上に据はり、蛙さんは蜜のおくすりを呑んで、水車の側の小石に腰掛け、足を水に浸しながら、お空を向いて、コロコロと静かに唱ひました。螢さんは、提灯をふつてお詞子をこりました。

お空のお星様は、この音楽を聞きに毎夜、小川の側に寄つてまゐります。

選外佳作の十二

トンボは何に乗つて行つ

たでせう

山 本 文 子

涼しい川の側で遊んで居りましたトンボは、すーつこ向ふに、も一つ流れてゐる大きい川べりまで遊んで居る澤山のお友達トンボの所に遊びに行き度くなりました。

まだ朝なので草の露もキラ／＼光つて、涼しいお風が吹いて居ります。おなかどすかない様に澤山御馳走をいたゞいてから、お羽根を真すぐに張つて、大きく息をして、元氣に飛び出しました。白い道がぎこ／＼續いて居ります。廻りの畑には胡瓜やトマトお茄子が美味しさをうに成つて居りますし、道には、可愛らしいお花が咲いて居ります。時々蝶々や虻に合ひました。

「お早やう」「お早やう」皆うれしさにご挨拶して飛んで行きました。

しばらく行きますとトンボは、お羽根が少しくたびれて來ました。何處かでお休みしませうかと思つて居りますと、後から大きい聲で「ヒーン」お馬が車を、ガラ／＼引いて來ました。

「丁度良い所へお馬さんが來た、あのお背中に止らせていたゞいたら、ひそりでに連れて行つて下さるでせう。」

ツイ止つたお背中は、廣くて軟らかい、そしてお日様に暖められてボカ／＼して居りました。トンボは、うれしくて珍らしくてお背中をあつちへ行つたりこつちへ行つたり大喜びでした。お馬さんは何だか自分のお背中がさつきからムズ／＼してなりません、ヒョイツ／＼しろを向く「オヤ、僕の背中でトンボが遊んでゐる。」

そしてピク／＼動かしましたがトンボはまだ氣が付きません。餘りムズ／＼するので、あの太い尾を振つてサツ／＼拂ひました。

「おー痛い／＼」トンボはびつくりして飛び上りました。まあ何がぶつかつたのでせうと良く見てやつ／＼氣が付きました。

「あゝ痛い筈、あの太いシツボがあたつたのですもの。」

トンボは又飛び出しました。お日様が段々高くなつて、暑くなつて來ました。しばらく行き

ますミ、又うしろの方で大きい聲がしました。

「モーモー」

何が来たのでせう、さう 大きい牛さんが車を引いて来ました。トンボは又止り度くなりま
した。

「でもお馬さんの様に太いシツボがあるかしら、オヤ、モーさんは細いから大丈夫でせう」
ミツイミ止りました。お馬さんのお背中より廣くて、白と黒の模様がありました。牛さんは急
にムズ／＼して来ました。僕の背中に何か止つたらしいと思つてビク／＼と動きました
が、その内二、三度尾を振つたかと思ふと勢よくサーツミお背中にあてました。

「オーイタタ……」トンボはもうお羽根が折れたかと思ひました。

もうひこりて飛んで行きませう、でもトンボはそれは／＼くたびれました。歸りませうか
しら、でも川は小さく向ふに見えて来ました、暑くて／＼なりません。

するミ、又うしろから、

「ブーブー」車の四つ着いた、お窓のある、それは／＼早く走るもの、何でせう？さう自動車
が走つて来ました。

「オヤ自動車だ、おれに乗せていたよいたら、もうすぐに行けるのに、でもシツボはないかし

ら

見るまゝ、シツボなぞ、どこにもありません、やつま安心して大きな乗合自動車の屋根に大急ぎでスレ／＼に止りました。緑色のツル／＼した、しつかりつかまつてないま滑つてしまひさうです。早い事／＼、トンボはうれしくてバンザーイミ云ひました。

川が段々大きく見えて來ました、オヤもう川に來ました。トンボは大急ぎで走つてゐる自動車の屋根から、飛び上りましたら、自動車はブーミ鳴らして、横の道に曲つて行きました。

「有難う自動車さん。」

遠いゝ所からトンボの來たのを見つけて、大勢が迎へに來て、「よく來て下さつた」ま喜びました。

面白く遊んだり、澤山御馳走になつて夕方になつてからさつきの道の所迄送つていたゞきました。

歸へりには、トンボさんは何に乗つて歸つたでせう！

大阪と神戸の三日

——全國保育大會——膳女史の葬儀——菊水の宴——

倉 橋 生

大阪毎日新聞社主唱の全日本保育大會が開催せられた十一月十三、四、五の三日間、大阪は實に晴朗の好天氣つき。第一日の總會、講演會。第二日の部會、午後ミ夜ミの講演會。第三日の總會。皆豫定通り豫期通りの大盛會であつた。私は第一日午後のBKからの大會記念放送ミ、第二日夜の中の島公會堂の講演ミの外、總會ミ部會ミの忠實な列席者ミして、建議に、討議に、研究發表に、此の大會の成功を心から喜んだ。殊に第二日の部會が、幼稚園部、保育所部、農繁託兒所部ミ三部に分かれ、それミ専門的に會議の進められたこは、從來の保育大會に於て、當然そうあるべく考へられつミも實行せられなかつたところで、本大會の一大新味ミして特筆すべきである。又我國保育事業

の綜合的發展のために、最も有意義なるものであつた。その會場が軍人會館、國民會館、大毎本社講堂ミ分れてゐるので、(それ程各部多數の出席)そのされにも一貫して出席するこは出來なかつたが、その間を馳け廻りながら、斯うして三部を竝べて見るミ、いろミ新らしく考へられる點も尠くなかつた。特に、我國の幼兒問題をさう觀るべきかに就て、廣い見渡しミ、遠い見通しミ、更に細かい考察ミの必要が、もつミ要求されてゐるこを思はざるを得ない。

それにしても、此の大會の斯くの如き盛會は、我國保育界のために欣慶この上ないこである。主唱幹部諸氏、中にも安間公觀氏の大いなる努力を感謝しなければならぬ。

保育大會の終つた十五日。その日は故騰たけ子女史の本葬日である。午後二時半から西區京町堀、順正寺に於て盛大に行はれたが、此の大阪市、殊に此の西區に於て四十五年の幼稚園保育生涯を、立派に而して幸福に送られた故人に對し、よくぞそのまゝころを選ばれたものまゝいはなければならぬ。公の諸方面からの多くの鄭重なる弔辭の後に、友人まゝして望月、稻葉兩女史の思ひを偲ぶ弔辭の後に、故人の保育を受けた江戸堀幼稚園五千の幼児の總代まゝして、京都帝國大學經濟學部長汐見博士の、故人に對する感謝まゝ尊敬まゝに充つる弔辭は、故人の溫容を最も髣髴させるものであつた。私も亦、御遺族に促されて弔辭を申上げたが、思へば、故人に初めてお目にかゝつたのが此の西區であり、爾來三十年餘。常に敬愛せる先輩であり、實に變りなき私の知己であつた。知人に對して誠心を移し動かすこゝの決してなき、故人の厚誼の如きは多くないであらう。

故人が江戸堀幼稚園を引退せられた時に、幼稚園人まゝしての故人に就て、私は本誌に一文を草したこゝがある。そ

の後の老女史は、京都嵯峨の里を閑居ませられたが、多くは鎌倉熱海まに悠々せられた。それはその風光ま溫暖まがお氣に入たからでもあらうが、令甥氏原醫學博士の別墅に令姉氏原銀子女史まの心おきな朝夕を樂しまれたのであつた。軽く糖尿病を病んでそのために視力を弱めてゐられたが、七十餘歳の老齡まは思はれないまめまめしさで、庭木、草花を愛するのが日課であつた。有徳人にふさわしい福やかな晩年であつたのである。しかも、その悠々の間、尙ほ切なる關心を持ちつゞけられたのは幼稚園界であつて、その消息を聽くを樂しまれ、われ等も亦事ある毎に幼稚園へお招きしたが、必ず喜んでその集るに來り加はられた。そんなこゝで、引退後は却つて東京のわれ等が常に近くにゐられた譯であり、鎌倉で急に御病氣革まれた時、及川さんまいつしよに、直ぐ馳けつくるこゝが出来、お目にかゝるこゝも出來たのであつた。

更めて、我國幼稚園界の貴き元老を哀惜する。

○

こんぎこそえ、折りや、ちよつこ神戸へも連れてきます

せき、神戸のおばあさん若い人達が懇に言つて呉れるが矢張りその時間がない。此の一、二年、度々神戸を通過しながらいつも素通りをして濟まないと思つてゐるのだが、こんざも亦暇がこれそうにない。残念に思つてゐるさ、そこは元氣のおばあさん、豫約してある寢臺券を二列車ほぎ遅いのに取り替へを交渉させて、ぐんぐん私をひつばつて、あの何んさかいふ、えらい急速度の電車へ乗せて、おゝしんざもいやはらんのである。

電車は直ぐに元町へ着。あの菊水の擬つた座敷へ案内されるさ、もうそこには、神戸の若い(おばあさんよりは)人達が待ち受けてゐる。こんな咄嗟の場合、挨拶は一同合笑で濟ます。直ぐに例の評判の金箔入のお銚子が出る。その金箔のきゝめで、大阪以來の動悸がおさまるさ、さあもう、面くらひでない御馳走くらひ。その間に、しんみり(?)した懐舊談が出たり、呑氣な懐今談が出たり、胃も心もうまい味に充ち満つるのであつた。

おばあさんいふのは望月くに女史、若い人達いふのは、山崎、田中、豊島、富中、宮崎、松永の諸若女史。勿

論みんな豫て懇意の幼稚園人。そこで望月さんには、面さ向つては流石こんな愛稱は捧げないが、何しろ、私が關西で初めて會つた幼稚園の第一番目の先輩なのだから、私の思ひ出がいつも其の時の若い私を基準とする以上、今の望月さんがおばあさんであるのは、當然(?)の數理である。兎に角く望月さんは、私を關西保育界へ結びつけた最初の知己であり、膳さんも望月さんの紹介で初めて會つたのであつた。そんな譯で、自然、話もその方へ向く。但し、知らない人のために念のためいつて置くが、望月さんは膳さんよりすつこくお若いのである。關西保育界の元老がだんく數少なくなつてゆく時、その元老間で、仕事の上では先きに立つても、年齢の上では後に居る望月女史の愈々益々元氣であるこゝを祝福して、又、もう一ぱい、金箔入りの盃をあげるのであつた。理窟ぬきで慰安して下さつた、古なじみなつかしの神戸の一夕。

幼児教育の文化性 (四)

— 講習筆記 —

倉 橋 惣 三

五四

目次

第一 序論

第二 道徳教育

第三 宗教教育

第四 藝術教育

(第三宗教教育のつゞき)

大變問題が廣くなりましたが、さう云ふ理窟は、幼児の場合に於てはハッキリ斯う言へるのであります。若しも大人の場合でありましたならば、頼る可き事と頼る可からざる事とがハッキリ分る筈でありますし、さう云ふものに頼る可きか頼る可きでないか云ふ事もハッキリ辨へがつく譯であります。それがつかなければ、慾に目が眩んだ云ふか、餘程さうかして居る云ふ様な事になるのであります。理窟は兎に角、さう云ふ位の判別はつく譯である。その上で尙ほ且、

下らぬ迷信に陥る云ふ事は、よくよく大人が迷信に入る前に先づ少し狂つて居る言はなければならぬのであります。然し乍ら幼児の場合に於きましては、何事をお願すべきであるか、お父さんにお願すること、お母さんにお願すること、神様にお願すること、そこらの差別等はつきませぬ。お小遣を頂戴云ふ事はお母さんに言ふ他ないのでありますが、それを神様のところに行つて、「お母さんは拾錢位しかくれないから、壹萬圓位くれるのはあるまいか」云ふのは、詰り持つて行き所が違ふのであります。又、さう云ふ事を持つて行く可きか云ふ事が分りませぬ。のみならず、一體何に頼る可きか云ふ事も小さい子供に分る筈がありません。大人でも、宗教の對象をハツキリ正しく捉へて行く云ふ事は容易ぢやないのでありますから、幼児には尙ほ更難しい。

そこでさつき申しました大きな一般的な理窟は兎に角しまして、幼児の場合に於て、頼むか頼るか云ふ方の事を先にして行きますと、寧ろその子供の宗教性を、さう云ふ慾をもつて宗教に赴く様な傾向に養ふ……導くことにならぬと限りませぬ。小さい時から、神様の前に行く云ふ事は何か請求に行く事である云ふ癖がついて居る事は、甚だ危険であると思ふのであります。そこで別に、御厄介にならぬ云ふ様な、そんな勝氣な事を言ふのではありませぬけれども、厄介になる云ふ方を先にしないで、一應感謝する云ふ氣持の方から養つて行けば、その心からは、決してするい下等な、卑しい政策本意の宗教の様なものにはなつて行かない譯であります。幼児の場合には、理窟も理窟でありますし、幼児そのものがまだ宗教に對して、その對象を、依頼すべき内容を決める力がありませんから、さうしても斯う云ふ事でもやつて行かなければならぬと思ふのであります。子供が親に色々な事を頼まみすのは、さう云ふ心理であらうか。決して、親にさう言へば何かくれるから頼む、云ふのではなからうと思ひます。それは、學生なんかは段々する奴が出来まして、親のところに電報を打つて「講習一週間延期、金送レ」(笑聲)なんと言へば、直ぐ爲替が来るか考へる手もある

のであります。然しこれはまあ「親を權つてやれ、親のミこころには確かに金があるから取つてやれ」ミ云ふするのですけれども、小さい子供が親に頼むのは、親にしてくれる力があるからせびつてやれミ云ふのではなく、日頃親に感謝して居ります——さう一々感謝ミ言ふのは言葉が強いが——親は自分に好意を持つてくれる人であるミ云ふか……しみじみ親だから頼みに行くのであります。自分に好意を持たざる人のミこころに頼みに行くミ云ふのは、最も下等なる事であります。頼みから始めて人に結びつくミ云ふのは、これは外道なる事であります。日頃感謝して居るから、つひ頼み心になつて行くミ云ふのが當り前の順序でありまして、子供が親に無遠慮にするのも、そこから出て来る。こころによりますミ、子供は、親にねだつて居り乍ら、何をねだつて居るか分らない事があります。「何するんだい？」ミ訊かれて、「何でもいゝから兎に角ねだらしめよ」——これは言ひ方によりましては非常にするいのでありますが、ものが欲しいのでなく、ねだる心を感じて持つて行くのであります。そのねだる心は、向かふの人の好意ミ、此方の氣持が、さう云ふ形で反映して來たに他ならぬミ言つてもいゝのであります。何だか、有難いミ云ふ感じをもこにして、そこから、濟まぬが一つお願に行かうか、ミ云ふならば宜しいのであります。先へ、依頼心ミか慾ミか云ふ様なものを本體ミして、感謝は後から來る決算であるミ云ふ考へ方は、健全なる宗教的態度ミ非常に相容れないものである。人間同志の関係では、感謝は後から來る、お禮……ミ云ふのは、後からお禮を言ふのは、極く正直に考へれば、後になつてお禮を言はざるを得なくなるでせうけれども、こころによつたら、先に言つて置いたならば損かも知れないから、確かに後になつて見届けてから、物をしつかり受取つてから、調べてから、宜しいミ言つて感謝する、先に感謝したらごんな目に遭ふかも知れないミ云ふ心も入つて居るかも知れませぬ。イギリス人は、よく人にものを頼みます時に「サンキュー、アドバンス」ミ云ふ言葉を使ひますが、私は英文で手紙等を寫して書く時はおかしいと思ふ。「斯う々々云ふ事に就て御依頼致します。サンクス、アドバンス」豫め感謝致し

て置きます。私はそれを書き乍ら、二つの意味で不思議で堪らない。一つは、先に感謝して大丈夫だらうか、若し頼んだ事をしてくれなかつたら、感謝を取り返す譯に行かない、だから日本流に、後に計算致す可く候、ミ云ふのが當り前ですが……。それは少し此方が打算主義ですが、もう一つは、先に感謝して置くミ云ふのは、少しずるく立廻る。——幼稚園協会の聴講料なんか、先にお出しになつて居ますけれども、本當は後からお出しになつた方がいゝですね。詰らなかつたら少し安くしていゝかも知れませぬ。(笑聲)——それを、先に出すのは、向ふをギリ／＼しめつける事になる。先に感謝されるミ、嫌々乍らこの用をきいてやらなければならぬ、ミ云つた様に縛られるものでありまして、さう云ふ下等な氣持から言ふミ、サンクス、アドバンスミ云ふ事はおかしいが、私は斯う解釋する。「日頃あなたには感謝して居る。そのあなたなるが故に、遠慮なくお願する」ミ斯う云ふ意味になると思ふのであります。これは非常に美はしいのであります。「切迫つまつた場合、余儀なく頼み候、うまくやつてくれれば後で考も有之候」ミ云ふ契約を神様のミころでやるのは非常に間違つて居る。あの神様に相當お賽錢を注込んだが眼病が治らぬから他に行つちやつた、ミ云ふのは、宗教の名に於て、人間の劣劣なる感情を暴露して居る場合だと思ふのであります。ミ云ふのは少し言ひ過ぎますが、さう言つて置いて、此方では、人間ミはさうしたものだミ責めやしない。一體人間ミは劣劣なものであります。劣劣で弱蟲で慾張りでする、これが人間の本當の姿であります。それがせめて多少美しい形に出たミころが宗教なんでありまして、だからサンクスアドバンスミ云ふのは、充分御諒解頂けると思ふ。

これは、理窟ぢやないのであります。幼兒を捉まへて、豫め感謝しなければならぬ……死ぬ間際になつてもそんな氣持で行けるか行けないかお互分らない事でありまして、理窟でそんな事を言つても仕様がなない。けれどもさう云ふ風な事を感じさせなければならぬ。何所かで感じさせるには——今度の私の講習、少し話がこんな問題ですから、朝の修養

講座の様になりました甚だ相済みませぬが、午後、まあラヂオ體操をやりますから……甚だ相済みませぬが——さう云ふ譯ですから、幼稚園の先生さ云ふものゝ根本の第一條件として、感謝性を湛へて居るさ云ふ事を必要とするのは、そこからであります。

私は幼稚園の保姆を招聘する時に、色々體格検査をします。ハ、ア、成程此處に心臓があつて音がして居る。胃袋があつて内分泌がある、さ云ふ事を調べると共に、頭にさの位の智能が這入つて居るか、それだけ、宇宙さか人生に就て感謝性があるか、少くも非感謝性、不平家であるかないかさ云ふ事は重要な條件であります。不平家は堪りませぬ。私としては不平家も宜しい。私がつひ下らぬ事で嬉しくなつて了ふのを、「深刻なる人生、却々不満である」さ言つて下されば私も非常に刺戟を受けるが、小さい子供にはそんな事は分らないのでありまして、感謝性より他に、人生を健全にする途はありません。ですから、理窟で感謝せよさ言つても仕様がなから、その先生自身の心の中にある感謝性、それがずつこ行く。まあ、感謝性のある人さ無い人さは、事毎に違ひます。雨が降つても「あゝ降りやがつた」さ言ふ人もあるし、「いゝおしめりだ」さ言ふ人もあるし、その感謝性があるさないさは、身邊に居ります幼児に非常な根本の影響を與へて行くものであるのです。

だから私は、宗教を教へる爲に幼稚園をお開きになる場合は、ミツシヨンも佛教も、謂はば宗教を傳へる爲であつたらば、さうも子供を捉まへて少し藥が利き過ぎる氣がする。けれども宗教から出ていらつしやる保姆諸君さか幼児教育者に非常に敬意を表するのは、その人が本當の宗教家である限り、その感謝性が言葉の端にも出て來るから、普通の義務なんかでやつて居ります場合さ違つて來るさ思ふのであります。

そこでこれは幾ら言つてもきりのない事でありまして止めますが、その感謝性だけでそんならば宗教心さ云ふものゝ

要素は盡きるだらうか云ふも、それが宗教です。それが宗教でありませんが、それに添へまして、本當にこれが宗教の形になつて、感謝云ふものは宗教ばかりでなく、社會的生活に於きましても根本である。人間に感謝性さへ養はれて居ればその人は決して間違つた事にならないのでありますが、それ程一般的な事ですが、宗教云ふ特定の形になつて來る爲には、もう二つ問題を考へていゝかと思ふのであります。

二、信賴性

三、神祕性

信賴性云ふ字と神祕性云ふ言葉を以て説明しようかと思ふのであります。

これは極く簡單にお話して置きますが、信賴性云ふ申しますのは、少し言葉が誤解を起すところがあります。「頼」云ふ字が宗教にくつついて居る。慾張つた頼み心、依頼心と似て居ります、言葉で、寧ろ「信」でいゝ。「信性」でいゝ譯であります。そこでその信性云ふか云ふ様な事は何であるか言ひます云ふも、そこに問題が起つて來ます。

昨日のお話で、人間に、そのキャラクターの中に彌蔓的に感謝性がある、電池の中に、電氣がポテンシャルに一杯になつて居る如く感謝性が満ちて居れば、何所かで放射する機會を探して居る。こつそり電氣が通ずる云ふのでなく、電氣は何時でも放電しようとして居るのであります。その様に感謝性云ふものは、私は實に感謝したいけれどもお禮に行くのが面倒である云ふ譯のものでなく、こゝに感謝の放電、即ちお禮の對象云ふものを探して居る心的態度だ云ふ事を申しました。まあ、おかしな事を言ふ様であります、例へば偉い西行法師があを通り色々な處にお出掛になつたのは何でせうか。あれは決して散歩して居るのではない。あの方は、胸に一杯感謝性があるから、その對象を到る處に探して歩いて居られる。さうして此處に行つてはこの山に感謝し、此處に行つては柳に感謝し、月に感謝し、曉に感謝し、鳥の

聲に感謝する。到る處に感謝する。立派な金堂のお社に感謝するだけで物足らなくて、山間の朽ちたる御堂に感謝するところ迄持つて行かうとする。對象が豪華版でなければただ感謝性が實は強く出るのであります。ですから西行さんの様になる。あの人はさうやつて非常に歩き廻つたのであります。

それ程、感謝性云ふものは對象を探して居る。幼児教育のところでは、私は對象をなまじあんまり早く片付けて與へない方がいゝかと思ひます。餘り對象を與へたまふと、對象に束縛されますから、成可く電池を放電する様に蓄めて置けばいゝ。さうして成年期になつてちやんこ何處かへ放電したがいゝと思ふのであります。細かいお話は別として、その何か探して居る、此所に問題が起るのであります。感謝性の方からは何かを探し度い。さうして人が、こんなに感謝の對象がある云ふ時に「彼處に行つてお禮參りをして來い」と言つて「さうですか」と言つて行くのですが、そこ迄は感謝性の自然の氣持として行くのですが、さてそこに行つて向ふを信ずるかどうかの話であります。これは別問題になります。何にでも感謝する云ふと、やたらに感謝する。「何でもいゝや、感謝は心であつて、感謝されるものは物で、物は感謝の心を託するものである」と云つた様な立場からは、下らぬ物だけども然し何しろこれに一寸感謝して置く、と云つた様な事になつて、向ふを本當に信ずると云ふ事とこれとは別個の問題であります。多くの人がそこで宗教的内部的苦しみをして居るのぢやありません。感謝したくてたまらないけれども、信ずる事が出来ない云ふのが宗教の苦しみであります。中には、頼みたくてたまらないが、何處へ頼んだらいゝか分らぬ、と醫者でも探して居る様な宗教を悩んで居る人がありますが、そんなのは、勝手に悩んで居る。さう云ふ人こそ、直ぐに、一寸誰か神様銀行頭取なん云ふのが出て來れば、インチキ宗教にかゝるのであります。さうでなくて感謝と云ふ事は、一杯に出て來るが……さうしてそこに行つて感謝する氣持は一杯に出るが感謝があるのにこれを信ずるかどうか、これは別の心理であります。感謝と云ふのは、心の働きと

言ひますか……人格全體のポテンシャルティーの様なものです。だから心の働きぢやない。その人柄です。不平家ミ感謝心ミは、その人の人柄であります。心臓の恰好でも違つて居るのでせう。

所で、信ずるミ云ふ方はこれは別の問題であります。そこでその信ずるミ云ふ方の事に就て、矢張り小さい時から問題を考へて置かなければならぬのであります。

そこで、その問題に就て斯う云ふ事を考へます。信ずるミ云ふのは、キャラクター全體の問題でないので、大體に於て普通智的な判断を、基礎ミします判断をするミ云ふのはおかしな事です。「あんたはさう云ふ人か知らぬが兎に角信じさせてくれ」ミか何ミか言はれる。まあそれは御隨意ですけれども、さう云ふ事を基礎にしてお出でになるかミ、斯う問題になる。信ずるミ云ふ事は判断ですから、判断は、基礎があつて、論理的に信ずるよりしかありません。論理的に信じて行くのであります。こゝでは、その信ずるミ云ふ事の問題である、斯う考へ度いのであります。論理的に信じて行くのであります。基礎がなければ信じられないのであります。基礎なしに信ずるミ云ふのは妄信であります。妄信では信じやありません。基礎がちゃんミあり、理窟がちゃんミあり、信ぜざる可からざる結論が頭に立つてから信ぜられるかさうかミ云ふのは別問題であります。決して、斯うで斯うだから信ぜられるミ云ふ譯に行きませぬ。二二二二二寄せれば四であるミ云ふ事を余は信ずるミ言ふ人がありましたならば、非常に偉いものだと思ひます。それは私は、二二二二二寄せればそれが四であるミ云ふ事が、私ミ云ふものを離れて客觀的普遍的にさうであるミ云ふ事を知つて居るだけの事であつて、「二二二二二寄せれば四である。あゝ……なんて、別にさうにもなりません。二二二二二寄せて五になつたミ言へば變てこになります。貰ふ方なら五にして貰つてもいゝが、貰ひ乍ら、勘定が變だミ云ふ事を言ふでせう。けれども二二二二二寄せて四になれば、疑ふ餘地はないのです。けれども信じて居るのぢやありません。これは、二二二二二寄せれば四

になる云ふ、天地不變の合理性だけの話であります。信とは、その基礎からその手続きで來まして、信の剎那迄は合理性で運んで來ますけれども、空中樓閣ぢやないのであります。段々作つて行かなければ出來ませぬけれども、一番終ひにボカツ信になるかならぬか云ふのは別の問題であります。合理性に石だけ積めば、その上に城の魂が宿るかごうか云ふのは別問題であります。その信云ふものゝ傾向を子供に養つて置く云ふ事は、非常に必要な事だと思ひます。信云ふ事を、合理性の教育だけに止めて置いては、甚だ足りないのであります。

さて、その信云ふのはそんなら何か云ふに、其所へ來る順序は合理的であります。皆様の中のお若い方がお聲さんをお選びになる場合でも、色々お調べになるでせう。日本中の新聞社に相談してお調べになるでせう。調べて、この通りだ云ふ事で、終ひに信するかごうか別です。そこで一番終ひにボカツ決つて來る。合理性が信になつて來る。そこは何だらうか云ふに、ごうもこれは、何だと言へませぬ。——うまく言ひくるめて逃げて行く様で相濟みませぬ。——

田〇を寄せれば水になる。私は田〇云ふ實驗をよく知らないけれども、まあ斯う云ふ事らしい。田〇云ふ二つの原子がぶつかつた、その時まあ何所かでバツミ……所謂剎那であります。あの人は實にいゝ人と思つて居ても、剎那にバツミ來なければ、その人ミ意氣投合する事はありません。この非合理性で信する事を、或心理學の本には易信性ミ書いてあります。これは、疑ひ易く、信じ易い。唯、信じ易い云ふのは人が好くなりますからあの字を避けて居るのであります。

信じ易いのでない、信じ難いのです。人間は、容易に信する事が出來ませぬ。合理的にさうであつたら云つて、信する譯に行きませぬ。だから易信性ぢやないけれども、その易信性ぢやないものに、或所でバツミ來る剎那がある。それが一體何であるか云ふ事は分りませぬ。分るかも知れませぬが、今私はよく言へない。言へないが、斯う云ふ事は言へるかと思ふ。

合理的にさうつみやつて来て、さうしてその結論が唯合理的に云ふ丈で終るか、所謂本當の信に云ふ事になるかきうか云ふ事は、多分その人の経験に基くであらうと思ふのであります。その人が、さう云ふ信になる様な危険を始終持つて居れば、合理性が信になります。合理性の所で止つちまふ経験で暮して居る人は、合理性で止つちまひます。こゝが問題だと思ふのであります。

そこで、さう云ふ経験を持つて居る人は、さう云ふ風に、幼児で言ひますならば、育てられて来た人はさう云ふ事になり易いのであります。そこからはなり易いと言つてもいゝかも知れませぬ。信に云ふ事の基礎は、合理性であります。その終ひの、バツミ行くかきうかは別個のこゝであつて、これはその人の體驗と言はうと思ふのであります。そこで、體驗であると思しますならば、斯う云ふ問題を——まあ時間をすつちつめまして結論に急ぎますが——考へようと思ふのであります。

感謝性を養ふのは、先生自身が持つて居る感謝性の影響であると思しました。不平家は幼稚園に於て絶対に存在の意義がないのであります。先生自身の感謝性がそこに行くより仕方がない。そこだけの話であります。所がこの信に云ふ事になります時には、その先生がものを信するその體驗性を持つて居る人であるに云ふ事も大事です。これは、田舎なんかに行きますと、いゝ子供に會ふ事がある。さうして、さうしてこんな純真に、疑はずして信じて行く力があるかと思ふのであります。會つて見るに、親がみんなそんな人である。殊にお母さんがさう云ふ傾向の人である。餘りその傾向で合理性がなくても信する、そこは一寸又困りますけれど、そこ迄行く。そこで、さう云ふ意味で、その人が信に云ふ傾向を持つて居るに云ふ事が必要ですが、私は茲で、感謝性を一寸區別し度いのであります。

その區別は何か言ひますと、信に云ふ様な事の本當の體驗は、自分が信ぜられるに云ふ事を必要とする様であり

ます。自分が信ぜられるに云ふ事、感謝の生活が傳はつて來ますのは、自分が感謝されるに云ふ事を必ずしもしない様です。これも、自分が感謝されたいです。先生自身が感謝性のある人ならば、幼児にも始終感謝するでせうからね。「私はイギリスで教養を受けたから、何事に就ても直ぐにサンキューに云ふ言葉が出る」に云ふ習慣でなくて、幼児が何かしてくれても、本當に、「有難う」に云ふ氣持になるでせう。それは先生の方がその心になるから、自然幼児は感謝される位置に置かれる事になりますが、これ丈ぢや感謝性に云ふものは養はれて來ないのであります。ここに依るに、餘り感謝されて得意になつて了ふ。「どうも今度の先生は感謝性が足りない」に云ふ様な事にならぬとも限りませぬ。だから感謝性は、他に先生が感謝して居るのを子供が見て居るに云ふ、同じ方向への生活態度であるべきだと思ふのであります。信賴の方は、自分が信賴されるに云ふ事が、自分がものを信賴して行く傾向になると思ふのであります。疑ひ深き人間は、一度も自分が信ぜられた事のない人であるに斷定して居ると思ふ。自分が信ぜられた経験を持つて居る者は、人を信ずると思ひます。——宗教性の話をして居ましてそんな事を言ふのは罰が當りさうですが、神様が羨ましい。神様の様にあらゆるものから信ぜられたならば、私も逆にあらゆるものを信ずるであらうと思ふ。此方が信じられるに云ふ経験が、信ずるに云ふ事になつて來るのであります。

そこで、幼稚園に於きましても、先生が幼児を信ずる、信賴する——頼に云ふ字は(字なんか説明しないでも宜しいが)癪のライぢやありません。英語で言ひますと、レイヤグル、詰り、その人は確かな人だ、に云ふ事であります。背任を背負つて一生やつて下さる人だ、誤魔化さないでやつてくれる、に云ふ見透しをつけるのを、レイヤグルに言ふのであります。——そこで幼児に向つて、あなたは斯う云ふ事をして下さいに言つた時に、二つの行き方があります。色々幼児にものをやらせまして、「あんたやつて御覽なさい。これも積古である。本當は私がやつた方が確かだけれども、積古だか

らやつて御覽。誤魔化さうと思つても駄目だぞ」云々色々な言葉が傳つて行く。子供は「成程これが教育云ふものか」思ひます。けれども遺憾乍らその時に、信頼される、云ふ體驗は少しも得ませぬ。中には、何か仕事をさせて置いて、出来なかつたならば「さうだらうと思つた」云ふ様に言ふ人があります。教育云ふものは、眞實の様な……少しインチキな所も入つて來ますが、私は、本當に幼児を信じ切る力がないからインチキになるので、本當に信じ切る人ならば、本當に眞實で行くと思ひます。例へば或事をさせた後で、子供はやり損ひます。出来ないのぢやないがやり損ふ。その時に「さうだらうと思つた」説明をつけて了ふが、それ御覽なさい云つた様な……何方が御覽だか分らない様な事を言ふが、出来なかつた事の方を、何か特別な理由で説明する。出来なかつた方の事を、特別の理由で「あんたが決して悪いんぢやない。私の見損ひだ」云ふのはいけません。見損ひ云ふのは、蓋をあげた様な話です。さうぢやない。さうして出来なかつたらうか、色々出来なかつた事もある、色々な外的の事情で出来ない事もある、斯う云ふ風に説明して、自分自身云ふものゝ衷心的の信頼に就ては、子供がスポイルされない様にして行く。そんな扱も出来るかと思ふのであります。

斯う云ふ意味で、先生が本當に子供を信じ切る事の出来る傾向の多い人であつたら、非常に宜しいし、さうでなかつたら……云ふより、もつゝ實際的に言へば、こんな氣持で居たつて、信じ切れない子供も遺憾乍ら多いのであります。そこでそれを信じ切る事は出来ないでせうが、教育に於ては、何か最少限度にでも信じない、この教育は出来ないのであります。幼児を最少限度に置く……これは幼児に限らない。大人同志も人を信ずるのは、最少限度に信ずるのが一番いゝのであります。人のまごころに借金をしに行く時は、向ふの貸してくれる最少限度で行け云ふのが秘訣です。私なんか始終實行して居る。

「一萬圓貸してくれ」なんて法螺を吹いて行つたのでは貸してくれませぬ。けれども、「五錢貸してくれ」云ふならば、

大抵成立する。だから、人を信ずるにしても、最少限度のところで信ずればよい。或人曰く「最少限度に信ずるのは、信じないに近い」。然し、最大限度に信ずるに云ふことこそいゝ加減なものであります。最少限度に信ずるに云ふ事は、詰り信頼に云ふか……信頼それ自體に云ふものが如何なる意義を持つて居るものであるかに云ふ事を示すのであります。感謝の方ではつまらない木のかげらにも感謝出来る。金色の光まばゆきものには誰だつて感謝しますが、首のかけた地藏さんにも感謝出来る時に、感謝性が強いものだに云つたと同じ様な行き方で、最少限度に信ずる所に信そのものゝ最大が出て来ると思ふのであります。

斯う云ふ意味で私は、小さい子供を信ずるに言つても大した事は出来ませぬが、信ずるに云ふ事の理論は、合理性から結論されて来るのであります。最少限度で信じたいのではない、最大限度で信じたいが、最少限度で信ずる、このもう一つ次は、自分が信ぜられたに云ふ経験が、理窟で言へない體驗になつて、他の人を信ずる傾向に養はれて行くのであります。自分が信ずるに云ふのは、理論の結論ぢやありませんから、こゝで、昨日の感謝性と同じ譯で、矢つ張りこゝから先はポテンシャルティーになりました、信じ度いに云ふ氣持になるのであります。信じ得るに云ふ所から、信じ度いに云ふ所に行くのであります。信じ度いに云ふのを普通の宗教で言ひます様な場合に、信じて一つ厄介になり度い、そんな意味の信じたいのぢやないのであります。だから、淋しいから信じ度いのぢやない。淋しいから……なんて云ふのは「此頃少し中風だから太い杖を買つて来よう」と云ふのの餘り違はない。さうぢやないので、信じ度いに云ふのは、何かを信ずるに云ふ態度でものに向はなければ、此方が空漠を感じる。中には、ものを疑ふ。疑つてく、否定してく行く時に靈の力が出る様なキャラクターの人もありますが、信じ度い氣持——そこに行く事は養へると思ふのであります。

斯う云ふ意味で、幼児の宗教性の問題が、感謝性から第二段のそこに行くのであります。最初に神秘性に云ふものを附

加へて置きましたが、まあこれ迄で大體宜しいのであります。けれども、こゝを何故つけて置くかと言ひますと云ふは、斯う云ふ問題が出て来る。

さつき、信頼と云ふ事は、生活の上で、信じ度いと云ふ事がポテンシャルライズされてさうなつて来るのだ、斯う言ひましたが、然し吾々が強く主張し度い事は、その根本が合理性に基礎を置く云ふ事は初めに申した通りであります。信じ度い、だから合理性はさうでもない、云ふ事は許さないものであります。然しこゝにさうは言ひましたけれども、次の問題が起りますのは、その合理性と云ふ事に就て考へ度いのであります。

合理性と云ふ事はラショナルでありまして、それはさう云ふものでありませう。唯その合理性と云ふ客觀的に存在する合理的法則と云つた様なものを、その一杯の合理性で理解したり認識したり把握したりして行く事が此方に出来るか出来ないか、と云ふのは別問題であります。世の中には科學があると言ひますけれども、それだけ科學が私達に持たれて居るでありませう。殊に、科學的根據に於てと云ふけれど、それだけの科學的根據が私達にあるでせう。さうするに、こゝでは問題は幼児でありますから、合理性々々云つた所で、幼児の合理性なん云ふものは實に微けきものであります。實にまあ合理性のほんのはしくれの様なものであります。そこで、若しその微弱なる、貧弱なる合理性だけで結論を立てて行くに云ふに止まるならば、これは到底満足は行きませぬ。私は斯う云ふ事を何時でも思ふのであります。

生意氣な人が世にある。宗教を批判して、「さうも科學的根據に於て立證せられぬから、我輩は信じない」と仰言るから、非常に偉い事を言ふと思つた。その人の顔を見るに、「一體あんたは、科學をどれだけ知つて居るか」と言ひ度くなる。「一體あなたの頭が、それだけの科學性を持つて居るか」と訊き度くなるのであります。その人が言ふに、「甚だ分らないけれども科學者のところに行つて聞いて來た」幼児と云ふものは科學性と云ふものに基いて行く様に育てられなければなりません。

ぬけれども、現在はそれがないのであります。ないから、理論は合理性の上に基礎を置かなければならぬと言ひますけれども、合理性そのものを、人間が一杯に持つ譯はないのでありますから、自分の體驗を云ふ範圍内に於ては合理性だけに止まらないで、そこから先に何かあるかも知れないから、直ぐに合理性だけで否定して了はない丈の關心を持たなければならぬのであります。

これはまあ、皆さん一寸靜かに御解釋を願ふが、普通神秘性に進むに云ふのは、中世紀あたりに出て來ましたのは、合理性と反對のものを言つたのであります。合理性以外のものがある、そこが神秘性の世界と言つたのであります。私はさう云ふ事に就ては知らない。私は合理性だけで一切が行くと思ふのであります。合理性以外の世界はないと思ふ。あの太陽さへもが合理的に動いて居るさうですから、そんな出鱈目はないと思ふのであります。神秘々々と言つて、合理性以外に神秘を立てれば、何が何だか分らなくなるのであります。だから合理性を一杯に持てるかさうか云ふ事は別問題であります。あります。けれども合理性は合理性であるけれども、私達が合理性を一杯に持てるかさうか云ふ事は別問題であります。

私達の科學性は、實に不完全で貧弱であります。そこでその合理性を云ふものが、私達に於て本當にそこから——私達には合理以外のものが澤山残つて居るのであります。世の中に、合理的以外のものがあるかさうか、それは知りませぬ。あるさきめて、一寸説明出來なくなるさ直ぐ合理性と言つて行くのは、實に縁日の人を集めて話して居る様なやり方です。決してそんな事ぢやないが、私達には、私達の持つて居る合理性では行かない世界があるであらう云ふ事だけでは信ずる。さう思はなくちやならないのであります。

そこで幼児に、吾々よりもつこ科學性か合理性で行けない事が澤山あると思ふのであります。それを、合理的でないから云つてポン／＼捨てるのは亂暴であると思ふのであります。

そこで斯う云ふ結論になるのでありますが、神祕性云ふ事は、自分の持つて居る合理性の領に於て感ずる謙遜なる態度であります。自分が持つて居る合理性——世の中に非合理なものは御座いますまいけれども、私共に分らぬから云つて、直ぐそれが非合理だ云ふ断定する譯には参りませぬ、云ふ氣持であります。世の中に、合理云ふ大きな法則以外のものは許させぬけれども、私共の持つて居る合理性に合はないから云つて、それが全く嘘である、間違つて居る云ふ事は出来兼ねます、云ふ態度であります。斯う云ふ氣持を子供に養ひ度いと思ふ。

有名なステューブンスンの詩にあります。子供が塀の此方から考へて、あの高い塀に登つた事はない、その向ふに何があるか知らない。大人ならば登つて見る事もある。彼方の世界を、子供は小さいから見ることが出来ない。子供の氣持が、ステューブンスンのこの詩によく出て居りますが、そんなものぢやないかと思ふのであります。證明が成立しないから嘘だ云ひ切り得る人は、自分が非常に偉い科學者であると思つて居る人で、證明出来ない事は嘘ですけれども、私は、證明出来ないから云つて直ぐ嘘は決らない、その氣持を、神祕性云ふ事で養つて行くのぢやないかと思ふのであります。世の中には、先生の様な偉い人にも分らぬものがある。「分らぬ人こそ尊まけれ」云ふ様な、そんな事を教へるのぢやありませぬけれども。行詰つた時に、自分の合理性でさうするか云ふ様な事よりは、もつこ先の事がある事を此方の謙遜なる態度で感ずる、斯う云ふ意味で、神祕性を解釋したのであります。必ずしもこれが宗教になりますものゝ限りませぬ。或は、宗教を分解したものゝも限りませぬ。けれども、斯う云ふものが幼児教育の中で養はれた時に、單なる、良善なる性情を涵養し、心身を健全に發達せしめる云ふ平板な解釋ではなく、偉大な宗教の文化に向つての立體性の教育が、こゝに出て来るのぢやないかと思ふのであります。

大變時間が長くなりますが、こゝで宗教云ふ問題を切り上げませう。

(次の藝術教育の項は、新年號から引きつゞき掲載いたします)

保育實習科新卒業者

東京女子高等師範學校保育實習科は昭和十三年三月、左の二十四名の新卒業者を保育界に送り出さうとしてゐます。皆それ〴〵適當な働き場所を得て斯界の爲熱心にその職に従事し度い希望にもえてゐます。御採用を切望致します。

氏名	出身學校	生年月日	氏名	出身學校	生年月日
井口美代子	居留民團立 上海日本高女	大正八年十月十六日	島村 春子	埼玉縣立柏壁高女	大正九年三月三十日
石川 智恵	第一東京市立高女	大正八年十一月二十一日	諏訪 潔子	岩手縣立盛岡高女	大正九年十二月二十七日
石澤 フミ	山形縣立山形第一高女	大正九年三月三十日	鈴木千恵子	愛知縣立津島高女	大正九年九月十二日
今井 滋子	東京双葉高女	大正八年十一月十八日	田中 幸江	東京成女高女	大正八年八月十三日
今井彌生子	東京府立第五高女	大正九年三月十二日	竹内 信子	東京府立第五高女	大正八年四月十五日
岩本 さよ	東京府立第一高女	大正九年一月二十八日	立花 清江	千葉縣立安房高女	大正九年三月十七日
香川由里子	東京櫻蔭高女	大正八年八月二十五日	坂 茂登	東京府立第五高女	大正八年十月十日
柿内 信子	東京女高師附屬高女	大正八年七月二日	藤田 コウ	新潟縣立新發田高女	大正九年五月六日
笠井 芳子	東京櫻蔭高女	大正八年九月三日	増田 貞子	神奈川縣立小田原高女	大正八年八月五日
川村たづ子	東京女高師附屬高女	大正八年六月十八日	松本 信	熊本縣立第一高女	大正九年二月一日
小林 良子	兵庫縣立第一神戸高女	大正九年二月二日	室岡百合子	富山縣立富山高女	大正九年十一月七日
櫻庭 咲子	秋田縣立秋田高女	大正九年一月十一日	安井 敏子	名古屋市立第一高女	大正八年十一月三十日

本誌
三十七卷
總目録

一月號

健康(保姆諸君と語る(一))
子どもと音楽に就いての感想

幼年
童話(床屋さんごっこ)

イギリス保育發達史(一)

フレイベル先生の遺跡を訪ひて(一)

簡單に出来る紙芝居の作り方

繪本應用紙芝居の作り方

公開保育を終つて

系統的保育案の實際解説

生活訓練

誘導保育

唱歌遊戲

談話

觀察

手技

二月號

服装(保姆諸君と語る(二))

倉橋惣三……一

信時潔……四

武田雪夫……九

白根孝之……三三

高市慶雄……三五

内山憲堂……三三

山村きよ……三九

………四七

倉橋惣三……四七

菊池ふじの

〔村上露子の

新庄よしこ

小島光子

及川ふみ

倉橋惣三……一

幼稚園に於ける幼児の個人調査

イギリス保育發達史(二)

鶏さんと英夫さんのお話

フレイベル先生の遺跡を訪ひて(二)

春の歌

おひな様

ちん／＼こぼかま

幼き者を「ひきいだす」ことゝる

自他一如

誘導保育案の一例

三月號

熱意(保姆諸君と語る(三))

イギリス保育發達史(三)

自然界と兒童

童話ニコ／＼のお日様

幼児の流行病

ビバの歌

新しいメリエ帖について

大いそぎ大いそぎ

日誌より

心の日記の二頁

伊藤堅逸……四

白根孝之……三三

武田雪夫……三九

高市慶雄……三五

曾根保……四七

及川ふみ……五三

〔小泉入雲……五九

齋藤善太郎……六五

大塚喜一……七二

富士見幼稚園……七九

倉橋惣三……一

白根孝之……四

吉田弘……一〇

横木楠耶……一六

田村均……二二

曾根保……二八

及川ふみ……三五

新庄よしこ……四一

留岡よし子……五五

保育日誌の中より

砂場は幼児の樂園

四月號

趣き(保姆諸君と語る四)

小學校入學檢定で感じたこと二つ三つ

猿蟹合戦の變遷

幼兒燕さんのエプロンのお話

童話

春の歌

山姥と三人の娘

教育界の轉向と保育

感想二つ

禮儀

ある試

お店あそび

生活と職業

五月號

事務(保姆諸君と語る五)

こども黨列傳

「鼠の嫁入」と兒童の心

幼兒に於ける健康の習慣に就て

徳久智江子……………六
大塚喜一……………六

倉橋惣三……………一

堀七藏……………四

小池藤五郎……………〇

武田雪夫……………〇

曾根保……………三

附屬幼稚園……………元

竹中良治郎……………三

菊池ふじの……………七

氏原鎮……………四

北條靜……………四

小島その……………四

菅原教造……………三

倉橋惣三……………一

石井庄司……………四

小池藤五郎……………七

久米京子……………六

子猫ちゃんのお日傘のお話
ヘレン・ケラー女史を迎へて者

學齡前幼兒教育機關と幼稚園の問題

第七回世界教育會に就て

新刊紹介

六月號

言葉(保姆諸君と語る六)

「鼠の嫁入」と兒童の心

幼兒の玩具

小さい鳩の坊やお話

「母の夢」他三篇

新しい手技二つ三つ

觀察話二つ

保育大會に出席して

新刊紹介

世界教育會議に就て

雜錄

七月號

廣い關心(保姆諸君と語る七)

子供と環境(一)

幼見と繪本

武田雪夫……………三
記者……………七

倉橋惣三……………一

小池藤五郎……………四

牛島義友……………七

武田雪夫……………三

曾根保……………六

竹中良治郎……………三

Y・Y……………三

小園……………三

倉橋惣三……………一

山下俊郎……………四

多田鐵雄……………三

子供黨列傳(二)

露子ちゃんと晴夫ちゃんのお話
路地の子供

小向喜美女史の勇退

幼稚園を覗く(一)

父への思慕

或る日の反省

馬のお話

石井庄司……三

武田雪夫……三

水谷年恵子……三

竹村……三

宇賀壽子……三

菊池ふじの……三

白根孝之……三

九月號

巻頭—世界教育會議

子供の環境

保育課程と保育案

お母さん話—子鼠さんと玉蜀黍のお話

結核豫防対策と虚弱兒童養護問題

第一回フレーベル賞幼兒童話審査發表表

入選童話十五夜のお山

” 時計の子供

” めだか

選外佳作積木の御殿

幼稚園を覗く(二)

お馬の話(二)

倉橋惣三……一

山下俊郎……四

和田實……八

武田雪夫……四

牛島隆則……三

倉田せつみ……三

佐藤久子……三

米田ヨネ……三

中野静……三

竹村一……三

白根孝之……三

倉橋惣三……三

雜錄

十月號

巻頭—現下の時局と幼兒保育

國民教育家及び女子教育家としてのフレーベル

子供の環境(三)

子供の黨列傳(三)

ビスケットとお猿さんのお話

入選童話「蟲の洋服屋さん」

” 「カツボと蛙」

幼稚園を覗く(三)

幼兒童話審査員會の夜

幼兒教育の文化性(二)

十一月號

巻頭—この秋

幼兒の遊び(一)

幼兒童話について

百合子さんの遠足のお話

時局の映する保育の二三

フレーベル賞童話

選外佳作「蝶々のくびかさり」

倉橋惣三……一

エツアールド
シュブランカー……四

山下俊郎……三

石井庄司……三

武田雪夫……三

菅野ミチ子……三

山本ユキ……四

竹村一……三

記者……三

倉橋惣三……三

倉橋惣三……一

牛島義友……五

小川未明……四

武田雪夫……七

及川ふみ……三

高桑博子……三

選外佳作かたつむりさん

” ふしぎな卵

” メダカの坊や

田舎の子供

幼児教育の文化性(三)

十二月號

卷頭—百年前の追想

拜み出す保育

クリスマス・ツリーとスミ子さんのお話

おはなしの道に我が友を得て

フレール賞童話

選外佳作 蚤と蠹蝨と蟋蟀の高飛び競争

” 森のお友達

” 豚の旅行

” 蛙と蝿

” トンボは何に乗つて行つたでせう

大阪と神戸の三日

幼児教育の文化性(四)

総目次

宮田 國子……三

K . S……三

小原 すみ子……三

常 石 貞……三

倉 橋 惣三……三

倉 橋 惣三……一

齋 藤 善太郎……四

武 田 雪夫……四

大 塚 喜一……三

幸 田 信子……三

中 村 全江……三

藤 崎 と ち……四

岡 本 千 枝 子……四

山 本 文 子……四

倉 橋 生……五

倉 橋 惣三……五

七

日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長 下村 壽 一
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉 橋 惣 三
 附屬幼稚園主事

日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス
- 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ク
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ
- 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
- 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査
 - 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

- 會ノ開催
 - 一、雜誌發行(毎月一回)
 - 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行
 - 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介
 - 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一名 會務ヲ總理ス
 - 主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
 - 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
 - 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ヶ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス
 - 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
 - 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

一ヶ月分	金參拾五錢	特等面一頁二等面一頁
半ヶ年分	金貳圓拾錢	金貳圓拾錢
一ヶ年分	金四圓拾錢	金貳圓拾錢
拾貳冊送	金四圓貳拾錢	金貳圓拾錢
拾貳冊送	金四圓貳拾錢	金貳圓拾錢
拾貳冊送	金四圓貳拾錢	金貳圓拾錢
拾貳冊送	金四圓貳拾錢	金貳圓拾錢
拾貳冊送	金四圓貳拾錢	金貳圓拾錢
拾貳冊送	金四圓貳拾錢	金貳圓拾錢
拾貳冊送	金四圓貳拾錢	金貳圓拾錢

昭和三十二年十二月十五日印刷納本
 昭和三十一年十二月十五日發行

（外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂下下さい）

不許複製 禁轉載

東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
 編輯 倉 橋 惣 三
 發行 柴 山 則 常
 印刷者 柴 山 則 常
 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
 印刷所 會社 杏 林 舍

發行所 日本幼稚園協會
 振替口座東京一七二六六番

注文規定

- 一、本誌御注文の方は凡て前金（郵税共）で願ひます。（對券代用の場合は總て振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます）
- 一、送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄と明記せられたし。
- 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。
- 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。
- 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

楽しい降誕祭とお正月の手技材料

豊富に取揃へて御用命をおまち致します。

後藤先生の新案各手技も揃つて居ります。

- ◇ストッキング用折紙 五十組 一〇〇圓
- ◇キャレンダー掛星形 十枚 五〇錢
- ◇星 一箱 三五錢
- ◇桜の葉 一箱 三五錢
- ◇折紙用状差材料 十枚 三五錢
- ◇舞 玉 一枚 三〇錢
- ◇羽子板 一人分 一〇錢
- ◇風用材料 十人分 一〇錢
- ◇獨樂用材料 五十個 八〇錢

後藤牧星先生案新手法——各種一組二〇錢宛

- ウキンド・ミル 十枚一組
- 仲よしシーソー 十枚一組
- 壁掛兼用孔雀箱 十枚一組
- 菊花模様おやつ入 十枚一組
- サンタ・クロースのお土産袋 十枚一組



食館レベール社 株式會社

番二六六三(33)話電・二町保神・田神・京東 社 本
 番七二八三(33)話電・五町後備・區東・阪大 所張出
 番八三九一(24)話電